

有価証券報告書

事業年度 自 2025年4月1日
(第106期) 至 2026年3月31日

SECカーボン株式会社

有価証券報告書

1. 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し、提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
2. 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

目 次

頁

第106期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	6
第2 【事業の状況】	7
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	7
2 【サステナビリティに関する考え方及び取組】	8
3 【事業等のリスク】	10
4 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	13
5 【重要な契約等】	16
6 【研究開発活動】	16
第3 【設備の状況】	17
1 【設備投資等の概要】	17
2 【主要な設備の状況】	17
3 【設備の新設、除却等の計画】	18
第4 【提出会社の状況】	19
1 【株式等の状況】	19
2 【自己株式の取得等の状況】	22
3 【配当政策】	23
4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	24
5 【従業員の状況等】	39
第5 【経理の状況】	41
1 【連結財務諸表等】	42
2 【財務諸表等】	75
第6 【提出会社の株式事務の概要】	89
第7 【提出会社の参考情報】	90
1 【提出会社の親会社等の情報】	90
2 【その他の参考情報】	90
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	91

監査報告書

確認書

内部統制報告書

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2026年6月19日

【事業年度】 第106期(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

【会社名】 S E Cカーボン株式会社

【英訳名】 SEC CARBON, LIMITED

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 中 島 耕

【本店の所在の場所】 兵庫県尼崎市潮江一丁目2番6号

【電話番号】 06(6491)8600 代表

【事務連絡者氏名】 経理部長 松 尾 三 四 郎

【最寄りの連絡場所】 兵庫県尼崎市潮江一丁目2番6号

【電話番号】 06(6491)8600 代表

【事務連絡者氏名】 経理部長 松 尾 三 四 郎

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次		第102期	第103期	第104期	第105期	第106期
決算年月		2022年3月	2023年3月	2024年3月	2025年3月	2026年3月
売上高	(百万円)	22,919	30,401	37,307	31,179	25,101
経常利益	(百万円)	3,779	7,610	11,555	7,716	5,683
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△)	(百万円)	3,039	5,402	7,299	5,750	△74
包括利益	(百万円)	3,400	7,365	11,870	3,895	5,831
純資産額	(百万円)	56,063	62,411	72,894	73,801	77,628
総資産額	(百万円)	62,608	72,554	87,798	81,395	87,016
1株当たり純資産額	(円)	2,757.74	3,070.21	3,586.28	3,680.64	3,871.46
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失(△)	(円)	149.54	265.81	359.16	285.59	△3.72
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	(円)	—	—	—	—	—
自己資本比率	(%)	89.5	86.0	83.0	90.7	89.2
自己資本利益率	(%)	5.6	9.1	10.8	7.8	△0.1
株価収益率	(倍)	7.9	6.6	7.3	7.3	—
営業活動によるキャッシュ・フロー	(百万円)	7,615	2,337	7,794	4,548	7,766
投資活動によるキャッシュ・フロー	(百万円)	△954	△4,349	△16,029	△5,404	△7,139
財務活動によるキャッシュ・フロー	(百万円)	△826	△1,027	△1,393	△2,989	△2,011
現金及び現金同等物の期末残高	(百万円)	22,188	19,087	9,424	5,070	3,613
従業員数	(名)	256	263	271	273	282

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2 第106期の株価収益率については、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。
3 2024年1月1日付で普通株式1株につき、5株の割合で株式分割を行っております。そのため、第102期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、「1株当たり純資産額」、「1株当たり当期純利益」を算定しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第102期	第103期	第104期	第105期	第106期
決算年月		2022年 3月	2023年 3月	2024年 3月	2025年 3月	2026年 3月
売上高	(百万円)	22,483	29,980	36,724	30,458	24,522
経常利益	(百万円)	3,752	7,566	11,494	7,580	5,644
当期純利益又は当期純損失 (△)	(百万円)	3,025	5,377	7,263	5,668	△91
資本金	(百万円)	5,913	5,913	5,913	5,913	5,913
発行済株式総数	(株)	4,138,868	4,138,868	20,694,340	20,694,340	20,694,340
純資産額	(百万円)	55,740	62,076	72,454	73,289	76,866
総資産額	(百万円)	62,132	72,118	87,279	80,699	86,400
1株当たり純資産額	(円)	2,742.35	3,054.25	3,565.21	3,655.74	3,834.20
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額)	(円)	40.00 (20.00)	64.00 (30.00)	100.00 (34.00)	100.00 (50.00)	100.00 (50.00)
1株当たり当期純利益又は 1株当たり当期純損失 (△)	(円)	148.85	264.57	357.39	281.54	△4.55
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	(円)	—	—	—	—	—
自己資本比率	(%)	89.7	86.1	83.0	90.8	89.0
自己資本利益率	(%)	5.6	9.1	10.8	7.8	△0.1
株価収益率	(倍)	7.9	6.6	7.4	7.4	—
配当性向	(%)	26.9	24.2	28.0	35.5	—
従業員数	(名)	254	260	268	270	279
株主総利回り (比較指標：配当込みTOPIX)	(%) (%)	81.8 (102.0)	124.8 (107.9)	191.0 (152.5)	160.8 (150.2)	204.1 (202.2)
最高株価	(円)	8,280	9,130	3,070 (14,830)	2,694	3,085
最低株価	(円)	4,900	4,860	2,271 (8,080)	1,750	1,700

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2 第106期の株価収益率及び配当性向については、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。
3 2024年1月1日付で普通株式1株につき、5株の割合で株式分割を行っております。そのため、第102期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、「1株当たり純資産額」、「1株当たり配当額(内1株当たり中間配当額)」、「1株当たり当期純利益」を算定しております。
4 最高株価及び最低株価は、2022年4月3日以前は東京証券取引所市場第二部におけるものであり、2022年4月4日以降は東京証券取引所スタンダード市場におけるものであります。第104期の株価については、株式分割後の最高株価及び最低株価を記載しており、株式分割前の最高株価及び最低株価を括弧内に記載しております。

2 【沿革】

年月	摘要
1934年10月	アーク炉用の電極製造を目的として、昭和電極株式会社(資本金200万円)を創立、設立と同時に鳴尾工場(1971年4月西宮工場に呼称変更、1975年2月閉鎖)を設置。
1935年8月	東京営業所(1944年6月東京事務所に呼称変更)を設置。
1946年2月	戦災により焼失した工場を再建、人造黒鉛電極の製造を開始。
1956年5月	各種炭素製品の販売加工等を目的として、東邦カーボン株式会社設立(現・連結子会社)。
1960年4月	名古屋出張所(1983年7月名古屋営業所に呼称変更)を設置。
1963年7月	株式を大阪店頭銘柄に登録。
1972年5月	京都工場(福知山市長田野工業団地内)建設着手。
1974年8月	本社を兵庫県尼崎市御園町に移転。
1974年10月	京都工場完成(西宮工場操業停止、全面移転完了)。
1984年7月	株式会社エスイーシーに商号変更。
1984年11月	大阪証券取引所市場第二部に上場。
1986年12月	協和カーボン株式会社と合併。 合併により岡山工場を引き継ぎ、アルミニウム製錬用カソードブロック及び特殊炭素製品の製造を開始。
1992年9月	岡山工場西大寺(加工工場)稼動。
1998年9月	岡山工場牛窓の生産停止。
2006年10月	S E Cカーボン株式会社に商号変更。
2009年1月	本社を現在地(兵庫県尼崎市潮江)に移転。
2011年11月	京都工場に主としてアルミニウム製錬用カソードブロックを製造する工場を増設。
2013年7月	東京証券取引所と大阪証券取引所の現物市場統合に伴い、東京証券取引所市場第二部に上場。
2022年4月	東京証券取引所の市場区分の見直しにより市場第二部からスタンダード市場へ移行。

3 【事業の内容】

当社及び当社の関係会社は、当社、当社の子会社3社、関連会社2社及びその他の関係会社1社で構成され、炭素製品及び鉄鋼製品の製造販売を主な内容とし、子会社及び関連会社は、当社製品の販売等、その他の関係会社は、鉄鋼製品の製造販売を行っております。

当社及び関係会社が営んでいる主な事業内容と、各事業に係る位置付けは、次のとおりであります。

(1) 主な事業内容

〔炭素製品〕 アルミニウム製錬用カソードブロック、人造黒鉛電極、特殊炭素製品、ファインパウダー及びその他炭素製品

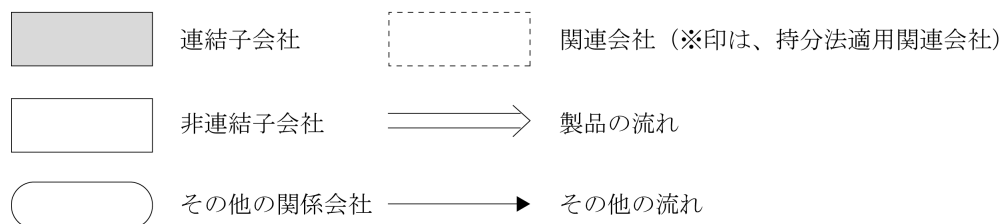
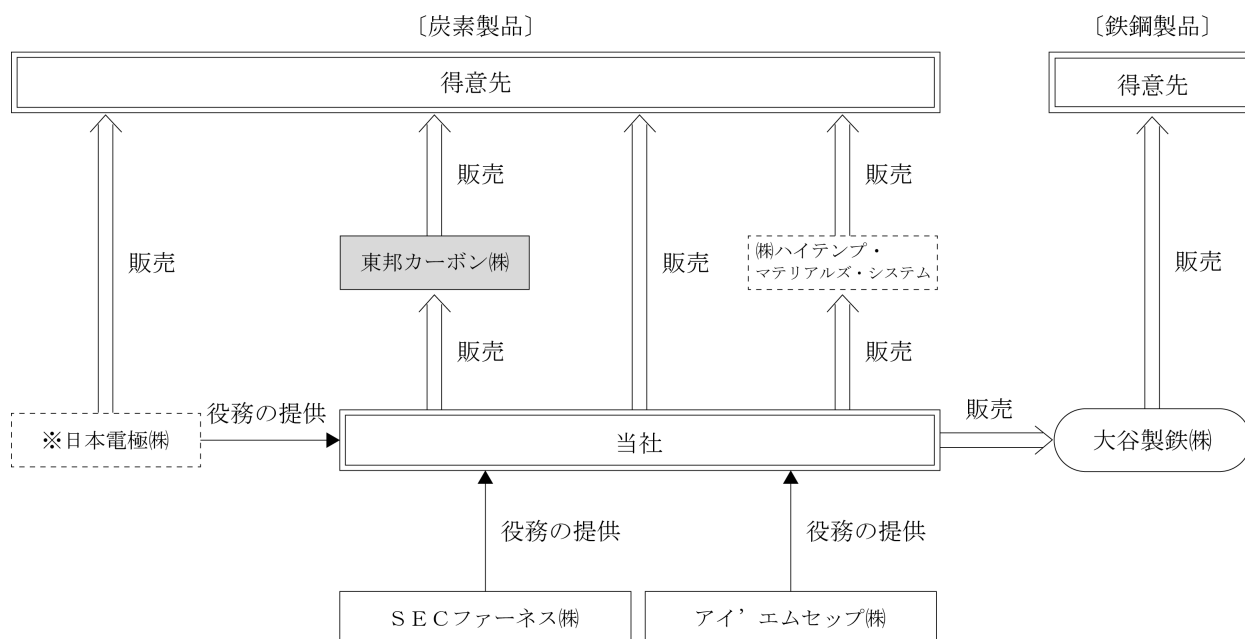
- 当社 …… 上記炭素製品を製造販売。
- 東邦カーボン(株) …… 当社より人造黒鉛電極、特殊炭素製品及びその他炭素製品を仕入れて販売。
- SECファーンネス(株) …… 当社工場構内における請負業務。
- アイ' エムセップ(株) …… 熔融塩電気化学に関わる研究開発。
- (株)ハイテンプ・マテリアルズ・システム …… 当社の特殊炭素製品を仕入れて販売。
- 日本電極(株) …… 炭素製品の製造販売および当社炭素製品の加工請負。

〔鉄鋼製品〕 電炉製鉄による鉄鋼製品

- 大谷製鉄(株) …… 当社より人造黒鉛電極を購入し、鉄鋼製品を製造販売。

(2) 事業系統図

以上を事業系統図で示すと次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有(被所有)割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割合 (%)	
(連結子会社) 東邦カーボン 株式会社	兵庫県 尼崎市	40	炭素製品の販売	97.4	—	・当社製品の販売 ・出向 1名
(持分法適用関連会 社) 日本電極 株式会社	静岡県 静岡市	1,200	炭素製品の製造 販売	20.0	—	・当社製品の加工請 負
(その他の関係会社) 大谷製鉄 株式会社	富山県 射水市	480	棒鋼製造販売	—	19.9	・当社製品(人造黒鉛 電極)の販売 ・役員の兼任1名

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

(経営理念)

わが社は流動する変化に挑み、無限の可能性を探求し、業界の最高峰をめざす

- ・わが社は需要家の要望に応える製品を創造する
- ・わが社は社員及び株主の幸福を増進する
- ・わが社は社会の福祉発展に寄与する

(経営の基本方針)

当社の経営理念のもと、世界から信頼され成長し続けるカーボンメーカーとして地球環境を大切に社会の発展に貢献することを当社グループのミッションに掲げ、企業活動を展開してまいります。

(2) 目標とする経営指標及び中長期的な会社の経営戦略

当社グループは、激変する外部環境に鑑み、三か年の中期経営計画に代えて、2026年4月に公表した中長期経営方針「2030 Make Real」の着実な実践に軸足を置いております。当該方針においては、最重要KPIとしてROEを掲げ、2030年度までにROE12%の達成を目指すとともに、その実現に向けて、①成長戦略の強化、②資本政策の推進、③経営体質の強化を経営の基本方針に設定し、資本効率を重視した経営を推進してまいります。また、普遍的かつ恒常的な経営方針として、サステナビリティ経営の推進を継続し、企業価値の拡大を目指してまいります。

(3) 会社の対処すべき課題

世界経済は、金融引き締めの影響、地政学的リスクの高まり等により、先行き不透明な状況が続いております。加えて、為替動向や各国の通商政策の変化も、当社グループを取り巻く事業環境に影響を及ぼしております。

当社グループの主要事業においては、アルミニウム製錬用カソードブロックでは競争環境の変化や在庫調整解消の遅れ、人造黒鉛電極では粗鋼生産の低迷や海外安価品の流入、特殊炭素製品及びファインパウダーでは需要回復の遅れなど、引き続き厳しい環境が見込まれます。

このような経営環境の中、当社グループにおいては、事業収益力の回復、成長領域の具体化、事業基盤の強化及び資本効率の向上が重要な経営課題であると認識しております。これらの課題に対応するため、成長戦略の再定義、ものづくりの底上げ、人材の質と量の再定義、IT基盤強化、カーボンニュートラルへの貢献、投資の加速、資本効率化の加速を次期の経営重点目標として、その達成を目指し全社一丸となって取り組んでまいります。

また、当社グループは企業の社会的責任を認識し、法令遵守を徹底するとともに、コーポレートガバナンスの充実や環境負荷の低減等、サステナビリティ経営の推進を通じて、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上に努めてまいります。

2 【サステナビリティに関する考え方及び取組】

当社グループのサステナビリティに関する考え方及び取組は、次のとおりであります。

(1) ガバナンス

当社は、創業以来、カーボンメーカーとして企業活動を行っておりますが、その歴史において、省エネルギー、省資源、産業廃棄物削減などの取り組みを進めるとともに、取引先様、地域社会の皆様、株主様、従業員との関係を大切にまいりました。当社は、1973年に経営理念（「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」に記載）を策定しました。この理念に基づく考え方は、世界から信頼され成長し続けるカーボンメーカーとして地球環境を大切に、社会の発展に貢献する旨を謳う当社のミッションにも反映されております。当社グループは、このミッションに相応しいサステナビリティ経営を推進し、経済、環境、社会面における諸課題の解決に向けた取り組みを継続してまいります。

取締役会はサステナビリティ全般に関するリスク及び機会の監督に対する責任と権限を有しており、取締役会内で、適時、その活動内容の成果の評価を行っております。

(2) 戦略

当社グループは、サステナビリティに対する取り組みをより深化させていくことが不可欠であるとの認識に基づいてサステナビリティ経営を推進しております。2026年度を初年度とする新たな中長期経営方針「2030 Make Real」においても、サステナビリティ経営の推進を表明しており、引き続き取り組みを継続してまいります。

特に、「サプライチェーン全体でのCO2排出削減」、「カーボンニュートラルに貢献する製品開発・上市」、「多様性の尊重と人材育成」、「地域社会への貢献」、「ガバナンス強化」、「ステークホルダーとの対話促進」の推進が、当社グループの持続的成長に向けた重要課題（マテリアリティ）と認識し、取り組みを進めてまいります。

人材の多様性の尊重に関しては、互いの異なる視点や価値観を尊重しながら、新たな気づきや発見を価値創造につなげていける組織風土を醸成するために、性別、国籍、年齢を問わず多様な人材の確保を目指して、女性採用、キャリア採用を積極的に行うとともに、継続雇用制度を導入しております。

人材育成に関しては、下図のような教育メニューや研修システムを整備し、従業員の成長意欲と向上心に応えることができる仕組みを整え、また経営理念にも掲げている「社員の幸福の増進」のために育児・介護等の支援を含めた働きやすい職場環境や諸制度の整備を行っております。また人材ポートフォリオ分析を通して人材の採用・配置・育成に対する当社のあり方を再定義し、戦略の実行に欠かせない人材の質・量の確保を図ってまいります。



(3) リスク管理

当社グループは、リスクマネジメント規程・危機管理規程を定め、潜在的なリスクの発生防止（リスク管理）および顕在化したリスクへの対応（危機管理）の両面から、リスクマネジメント体制を推進しています。リスク管理に関しては、リスク管理担当役員がリスク管理を統括するとともに、取締役会が選定する重要リスクについて、そのリスク管理状況を定期的にモニタリングしています。また、大規模な災害やシステム障害等が発生した際に、可能な限り短時間で事業活動の再開ができるよう、事業継続計画（BUSINESS CONTINUITY PLAN:BCP）を策定し、定期的に訓練を実施しています。

(4) 指標及び目標

当社のリスク管理においては、リスク管理担当役員が統括の下、期初に市場・原料調達・設備老朽化・環境など重要リスクおよび個別リスクを定め、その低減のための活動に取り組んでおります。期末にはリスク低減活動の評価を行い、その評価を基に次期のリスクを定めて活動を進めております。

当社は2050年カーボンニュートラルの実現に向け、2030年までにCO2排出量の46%削減（2013年度比）を目指しており、2026年3月末時点ではCO2排出量は36%削減（2013年度比）となっております。

人材の多様性の尊重に関し、2031年3月までに「採用者に占める女性の割合を20%以上にする」ことを掲げ、積極的に女性の採用に取り組むとともに、キャリア採用については重点分野における人材獲得を目指してまいります。

3 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があるとして認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。

なお、文中における将来に関する記載は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

「市場に関するリスク」

(1) 製品需要による売上変動

当社グループの主力製品であるアルミニウム製錬用カソードブロック、人造黒鉛電極及び特殊炭素製品は、アルミニウム業界、電炉鋼業界、半導体・電子材料業界等の設備投資動向や景気変動の影響を受けます。特に、中国・インドメーカーとの競争激化、顧客ニーズの多様化、新規設備投資の延期等により需要が変動した場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。当社グループは高付加価値製品の開発、品質改善、顧客との長期契約及び技術サポート強化等によりリスク低減に努めておりますが、予期せぬ需要変動を完全に回避できるものではありません。

(2) 為替の変動

当社グループの主力製品であるアルミニウム製錬用カソードブロックがアルミニウム業界の特性から100%輸出製品ということもあり、人造黒鉛電極、一部特殊炭素製品と合わせ近年の当社グループの輸出比率は総売上の5割を超える結果となっており、為替変動の影響を強く受ける体質となっております。為替変動リスクにつきましては、米ドル/日本円の為替エクスポージャーを小さくすべく、円建での輸出や米ドル以外の通貨での輸出を増やす努力をするとともに、為替予約等によるリスクヘッジを行っておりますが、当該リスクを完全にヘッジできるものではありません。

(3) 原材料価格の上昇及び調達リスク

当社グループの使用する原材料は、石油石炭価格や需給バランスの影響を大きく受けます。また、特定サプライヤーへの依存や供給元設備トラブル、地政学リスク等により原材料の安定調達に支障が生じる可能性があります。原材料の価格高騰や調達難等、市況に予期せぬ変動が生じた場合等には当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 特定大口販売先

当社グループの契約先別売上上位1社でシェアは60%程度となっておりますが、この契約先は商社であり、取引の大部分は輸出取引で最終需要家は海外を中心に分散しております。当社グループは輸出取引の円滑化と最終需要家に対する信用リスクの軽減のためもあり商社を活用しております。

当社グループの国内取引につきましては、1社で10%を超える販売シェアを有する取引先はなく、特定大口販売先のリスクは限定的であります。

(5) 米国の関税政策

米国の関税政策については、現時点では当社グループの売上高に占める米国向けの輸出は多くなく、直接的な影響は軽微なものと考えており、また間接的な影響については不明であります。しかし先行きは不透明な状況となっており、今後の米国の政策動向によっては当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 中東情勢の影響

当社グループの製品は、商社等を通じて海外顧客にも販売されており、その輸送には海上輸送が利用されています。中東情勢の悪化に伴い、一部航路において迂回輸送や港湾混雑等が発生した場合、輸送リードタイムの長期化、物流費の増加又は納期への影響が生じる可能性があります。

また、原油価格やエネルギー価格が上昇した場合、A重油等の燃料に加え、原材料価格や電力料金等にも影響が及び、当社グループの製造コストが増加する可能性があります。

当社グループでは、商社等の取引先と連携し、輸送状況の把握、必要に応じた輸送ルートの見直し、価格改定等により影響の低減に努めております。しかしながら、海上輸送の遅延や運賃の上昇が長期化した場合、また原材料・エネルギー価格の上昇を販売価格に十分に転嫁できない場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性があります。

「事業活動に関するリスク」

(1) 環境規制の変更

当社グループは、法令遵守を基本として事業を遂行しておりますが、今後国内外でより一層厳しい規制が実施された場合、事業活動への制約拡大やコスト増加で当社グループの業績に影響が出る可能性があります。

(2) 大規模災害の発生

当社グループは、組織の簡素化、生産の効率化、人的資源の有効活用のため主要生産設備を京都工場に集約しております。同工場の所在する福知山地区で大地震や大規模風水害等の災害が発生した場合、生産活動に大きな影響の出る可能性があります。

(3) 感染症の感染拡大

新型コロナウイルス、インフルエンザ等の感染症が拡大した場合、従業員の欠勤増加や操業制限等により生産活動や営業活動に影響を及ぼす可能性があります。当社グループは感染防止対策や事業継続体制の整備に努めております。

(4) 情報管理及びサイバーセキュリティ

企業秘密や顧客情報等の漏洩、サイバー攻撃によるシステム障害等が発生した場合、社会的信用の低下や損害賠償等により当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。当社グループは情報管理体制の強化及び社員教育を推進しております。

(5) 人材確保及び技術伝承

当社グループでは、技術者の高齢化や専門人材不足により、技術伝承や人材育成が十分に進まない場合、品質・技術力・サービス力の低下につながる可能性があります。当社グループは教育体制の整備、ジョブローテーション及び採用強化等に取り組んでおります。

(6) 重要な訴訟について

現在、当社グループは、財政状態及び経営成績に重大な影響を及ぼす訴訟は抱えておりませんが、今後そのような訴訟等が発生した場合、業績に影響を与える可能性があります。

「中長期の視点から事業に影響を及ぼす可能性のあるリスク」

(1) 技術革新及び新製品開発

当社グループの製品群は製造期間が長く、短期間に新製品が誕生し、市場が一挙に変化するというような状況にはありません。当社グループは取引先と永年にわたる信頼関係を構築しており、その信頼に応えるべく取引先の要望に沿った製品の改良、開発に努めておりますが、取引先の環境の変化や技術革新に対応できない場合は当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

上記以外にも事業活動を進めていく上で、様々な外的・内的要因リスクが当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。当社グループは、こうしたリスクを回避、またはその影響を最小限に抑えるため、取締役会で毎年重要リスクを選定し、当該リスクの管理状況を定期的にモニタリングしています。また、大規模な事故、災害、感染症拡大等が発生した場合に、人的な安全と事業の継続を確保するための施策を種々講じています。

4 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要並びに経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

(1) 経営成績

当連結会計年度の世界経済は、一部地域に弱さが見られ、景気持ち直しの動きが鈍化しています。また、中東地域の急速な情勢悪化による原油高騰、物流危機など地政学的リスクの顕在化、世界的な金融政策引締めに伴う経済の減速懸念、米国の通商政策による影響等があり、先行きの経済見通しについては、依然として不透明な状況が継続しました。

我が国の経済においては、景気は、雇用・所得環境の改善等により緩やかに回復している一方、消費者物価の上昇による個人消費の足踏み等により下振れる懸念が高まっています。

このような状況下、当社グループでは、持続的成長に向けて成長投資、品質向上、製品の拡販等の経営体質強化に取り組んでまいりました。

当連結会計年度では、炭素製品全般において販売が低調に推移しました。特にアルミニウム製錬用カソードブロックや特殊炭素製品、ファインパウダー及びその他炭素製品において販売が減少しました。その結果、売上高は251億1百万円となり、前年同期に比べて19.5%の減収となりました。

損益面に関しましても、販売数量減少の影響が大きく減益となりました。

その結果、営業利益は40億8百万円（前年同期比41.3%減）、経常利益は56億8千3百万円（前年同期比26.3%減）となりました。また、特別損失に減損損失60億6千3百万円を計上したことに伴い、親会社株主に帰属する当期純損失は7千4百万円（前年同期は親会社株主に帰属する当期純利益57億5千万円）となりました。

なお、当社グループは炭素製品の製造・販売を主な事業とする単一セグメントであります。当連結会計年度における製品別の売上高については、次のとおりであります。

・アルミニウム製錬用カソードブロック

アルミニウム製錬会社における更新需要の鈍化およびカソードブロックの在庫調整の影響により、販売数量が減少しました。その結果、売上高は169億4千9百万円となり、前年同期に比べて23.0%の減収となりました。

なお、在庫調整は想定より時間を要しているものの解消に向かっております。

・人造黒鉛電極

国内外において粗鋼生産が低調に推移しており、販売数量は減少しました。その結果、売上高は44億8千2百万円となり、前年同期に比べて0.9%の減収となりました。

・特殊炭素製品

熱処理炉向けおよび非鉄金属関連向け等の需要減により販売数量が減少しました。その結果、売上高は28億9千6百万円となり、前年同期に比べて20.7%の減収となりました。

・ファインパウダー及びその他炭素製品

モーターブラシ向け等の需要減によりファインパウダーの販売数量が減少しました。その結果、売上高は7億7千2百万円となり、前年同期に比べて22.6%の減収となりました。

生産、受注及び販売の実績は次のとおりであります。

① 生産実績

当社グループは、単一セグメントの下で以下の製品を生産しております。

当連結会計年度における生産実績は、次のとおりであります。

区分	金額(百万円)	前年同期比(%)
アルミニウム製錬用カソードブロック	18,045	△14.7
人造黒鉛電極	4,751	1.7
特殊炭素製品	2,463	△8.9
ファインパウダー及びその他炭素製品	812	△6.9
合計	26,072	△11.3

(注) 金額は、販売価格によっております。

② 受注実績

当社製品は国内、輸出とも一部受注生産をする場合がありますが、製造期間が長い為、基本的にはユーザーの生産動向をベースにした見込生産であります。

③ 販売実績

当社グループは、単一セグメントの下で以下の製品を販売しております。

当連結会計年度における販売実績は、次のとおりであります。

区分	金額(百万円)	前年同期比(%)
アルミニウム製錬用カソードブロック	16,949	△23.0
人造黒鉛電極	4,482	△0.9
特殊炭素製品	2,896	△20.7
ファインパウダー及びその他炭素製品	772	△22.6
合計	25,101	△19.5

(注) 主な相手先別の販売実績及び総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額(百万円)	割合(%)	金額(百万円)	割合(%)
住商CRM株式会社	20,768	66.6	14,514	57.8

(2) 財政状態

総資産は、前連結会計年度末と比較して56億2千1百万円増加し、870億1千6百万円となりました。主な増加は、商品及び製品の増加12億9千5百万円、機械装置及び運搬具の増加19億5千7百万円および投資有価証券の増加100億8千9百万円です。主な減少は、仕掛品の減少12億7千2百万円および建設仮勘定の減少69億5千2百万円です。

負債は、前連結会計年度末と比較して17億9千4百万円増加し、93億8千8百万円となりました。主な増加は、買掛金の増加3億4千8百万円、未払法人税等の増加4億9千2百万円、未払金の増加等による流動負債その他の増加5億2千5百万円および繰延税金負債の増加8億5千万円です。主な減少は、退職給付に係る負債4億2百万円です。

非支配株主持分を含めた純資産は、前連結会計年度末と比較して38億2千6百万円増加し、776億2千8百万円となりました。主な増加は、その他有価証券評価差額金の増加56億7千3百万円です。主な減少は、利益剰余金の減少20億7千9百万円です。

以上の結果、自己資本比率は、前連結会計年度末の90.7%から89.2%となりました。

(3) キャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローは77億6千6百万円の収入超過、投資活動によるキャッシュ・フローは71億3千9百万円の支出超過、財務活動によるキャッシュ・フローは20億1千1百万円の支出超過となりました。以上の結果、当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前年同期に比べ14億5千7百万円減少し、36億1千3百万円となりました。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

税金等調整前当期純損失4億2千3百万円に、減損損失60億6千3百万円、減価償却費20億4千8百万円、未収消費税等の減少額7億9千9百万円を加算し、法人税等の支払額10億7千3百万円を減算した結果、77億6千6百万円の資金の増加（前年同期は45億4千8百万円の資金の増加）となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

定期預金の払戻184億5千万円の収入があった一方、定期預金の預入200億2千万円、有形固定資産の取得35億6千7百万円、投資有価証券の取得19億5千9百万円を支出したこと等により、71億3千9百万円の資金の減少（前年同期は54億4百万円の資金の減少）となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

配当金の支払に20億4百万円を支出したこと等により、20億1千1百万円の資金の減少（前年同期は29億8千9百万円の資金の減少）となりました。

当社グループの資本の財源及び資金の流動性につきましては、当社グループの資金需要のうち主なものは、原材料費等の製造費用、販売費及び一般管理費等の営業費用並びに設備投資等によるものであります。当社グループの運転資金および設備投資資金は、内部資金または借入により資金調達することとしております。

(4) 重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたって、当社グループにおける過去の実績等を踏まえ合理的に見積りを行っておりますが、見積りには不確実性が伴うため、実際の結果と異なる場合があります。

連結財務諸表の作成にあたって用いた会計上の見積り及び仮定のうち、重要なものは「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 (重要な会計上の見積り)」に記載しております。

5 【重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

当社グループの研究開発活動は当社の技術開発部が中心となり、関連部署及び外部機関との連携のもと炭素材料の製造・評価に関する研究と新製品開発を積極的に進めております。

当社グループは、炭素製品の製造・販売を主な事業とする単一セグメントであります。

研究開発活動は、主に電解用電極、高温工業炉用部材、電池用等の特殊ファインパウダーに関する基礎研究について行っております。また、カーボンニュートラルの実現に向けた二酸化炭素資源化をテーマとした研究も進めております。

なお、当連結会計年度の研究開発費は573百万円であります。

(1) アルミニウム製錬用カソードブロック及びその他の電解用電極

世界標準の黒鉛化カソードブロックの実績をベースに、大電流・大型電解炉に対して耐摩耗性に優れた新グレード品の開発に取り組んでおります。その他、各種高機能品製造に用いられる電解用電極の研究も進めております。

(2) 高温工業炉用部材

高温かつ特殊ガス雰囲気にて用いられる各種黒鉛部材の長寿命化を目指し、研究開発を進めております。

(3) 特殊ファインパウダー

永年にわたって培ってきた高度黒鉛化処理技術とファインパウダー技術を駆使し、リチウムイオン二次電池用や燃料電池部材用のさらなる高性能化に対応すべく、コスト・パフォーマンスに優れた製品の研究開発を進めております。

(4) 二酸化炭素資源化に関する基礎研究

熔融塩電解技術を応用した黒鉛粒子の研究を推進しております。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループは、生産設備の増強、合理化、品質の向上及び新製品の開発等を目的とした投資を行っております。

当社グループは、炭素製品の製造・販売を主な事業とする単一セグメントであるため、当連結会計年度の設備投資の内訳は、事業所別に記載しております。その内訳は次のとおりであります。

(当連結会計年度)

京都工場	3,575百万円
岡山工場	38
その他の事業所	40
合計	3,654百万円

(注) 1 所要資金は自己資金によって充当しております。

2 設備投資額には、無形固定資産への投資額を含めて記載しております。

2 【主要な設備の状況】

当社グループは、炭素製品の製造・販売を主な事業とする単一セグメントであります。

なお、当社グループの主要な設備は以下のとおりであります。

(1) 提出会社

2026年3月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
		建物 及び構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積㎡)	その他	合計	
京都工場 (京都府福知山市)	炭素製品製造設備	5,170	4,886	232 (490,469)	1,564	11,853	207
岡山工場 (岡山県岡山市東区)	特殊炭素製品 加工工場	258	63	928 (132,775)	36	1,287	23
旧岡山工場牛窓 (岡山県瀬戸内市)	工場跡地、倉庫	—	—	79 (118,855)	—	79	—
本社 (兵庫県尼崎市)	販売業務他	11	0	—	27	39	34

(2) 国内子会社

主要な設備はありません。

(注) 1 帳簿価額「その他」は、「工具、器具及び備品」、「リース資産」及び「建設仮勘定」の合計であります。

2 本社の建物を賃借しております。賃借料は41百万円であります。

3 上記の他、主要な賃借及びリース設備はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

中長期的な安定供給体制を構築するために、当連結会計年度末現在、当社京都工場において「人造黒鉛電極の加工設備新設工事」および「捏合成形設備の更新」を計画しております。

「人造黒鉛電極の加工設備新設工事」におきましては、現在工事に着手しており、2027年3月期中の完成を見込んでおります。「捏合成形設備の更新」におきましても、引き続き計画に基づき実施してまいります。

(2) 重要な設備の除却等

経常的な設備の更新のための除却を除き、重要な設備の除却等の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	77,854,000
計	77,854,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2026年3月31日)	提出日現在発行数 (株) (2026年6月19日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	20,694,340	20,694,340	東京証券取引所 スタンダード市場	単元株式数は100株 であります。
計	20,694,340	20,694,340	—	—

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金 残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2024年1月1日 (注)	16,555,472	20,694,340	—	5,913	—	4,705

(注) 株式分割(1:5)によるものであります。

(5) 【所有者別状況】

2026年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	14	20	114	69	5	3,834	4,056	—
所有株式数(単元)	—	22,354	2,709	115,915	11,601	50	54,087	206,716	22,740
所有株式数の割合(%)	—	10.82	1.31	56.07	5.62	0.02	26.16	100.00	—

(注) 1 自己株式646,695株は、「個人その他」に6,466単元、「単元未満株式の状況」に95株含まれております。

2 上記「その他の法人」には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が25単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2026年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
大谷製鉄株式会社	富山県射水市奈呉の江8-4	3,980,000	19.85
三菱商事株式会社	東京都千代田区丸の内2-3-1	1,961,000	9.78
住友商事株式会社	東京都千代田区大手町2-3-2	1,006,500	5.02
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区赤坂1-8-1 赤坂インターシティAIR	980,300	4.89
日本カーボン株式会社	東京都中央区八丁堀1-10-7	813,000	4.06
公益財団法人大谷教育文化振興財団	兵庫県西宮市川西町13-10	679,500	3.39
大谷民明	兵庫県神戸市東灘区	600,000	2.99
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内1-4-5	533,470	2.66
大和工業株式会社	兵庫県姫路市大津区吉美380	477,500	2.38
日鉄エンジニアリング株式会社	東京都品川区大崎1-5-1	418,250	2.09
計	—	11,449,520	57.11

(注) 上記所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は次のとおりであります。

日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口) 980,300株

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2026年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 646,600	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 20,025,000	200,250	—
単元未満株式	普通株式 22,740	—	—
発行済株式総数	20,694,340	—	—
総株主の議決権	—	200,250	—

(注) 1 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が2,500株(議決権25個)含まれております。

2 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式95株が含まれております。

② 【自己株式等】

2026年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計(株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
(自己保有株式) S E Cカーボン株式会社	兵庫県尼崎市潮江一丁目 2番6号	646,600	—	646,600	3.12
計	—	646,600	—	646,600	3.12

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号及び会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(百万円)
取締役会(2026年5月14日)での決議状況 (取得期間2026年5月15日～2026年11月30日)	450,000 (上限)	1,000 (上限)
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	—	—
残存決議株式の総数及び価額の総額	—	—
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	—	—
当期間における取得自己株式	113,400	294
提出日現在の未行使割合(%)	74.80	70.56

(注) 当期間における取得自己株式には、2026年6月1日からこの有価証券報告書提出日まで当該決議に基づく取得による株式数は含まれておりません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(百万円)
当事業年度における取得自己株式	101	0
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2026年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (百万円)	株式数(株)	処分価額の総額 (百万円)
引き受ける者の募集を行った 取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、株式交付、会社分割 に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (単元未満株式の買増請求による売渡)	—	—	—	—
保有自己株式数	646,695	—	760,095	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、2026年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、中長期的な企業価値の向上を図るべく経営基盤の強化を進めるとともに株主の皆様に対する永続的かつ安定的な利益還元を経営の最重要課題と考えております。剰余金の配当につきましては、収益性の向上と財務の健全性を図りつつ、通期1株当たり100円、または連結配当性向30%のいずれか高い方を基準としております。

当社の剰余金の配当は中間配当及び期末配当の年2回を基本としております。

なお、当社は、「剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については法令に別段の定めのある場合を除き、取締役会の決議によって定める。」旨を定款に定めております。

内部留保資金の用途については、成長投資や安定的な利益配分の原因に充当してまいります。

当事業年度の剰余金の配当につきましては、上記方針に基づき、次のように決定いたしました。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2025年11月13日 取締役会決議	1,002	50
2026年5月14日 取締役会決議	1,002	50

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社のコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方は、将来にわたり、炭素専門メーカーとして需要家に対し原料・製品の安定供給を行うという重責を果たし続けるとともに、株主、取引先、地域社会、従業員等のステークホルダーとの共栄に資するため、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上を図り、コーポレート・ガバナンスの充実に取り組みます。

当社のコーポレート・ガバナンスは、次の5つの考え方を柱としております。

- ・株主の権利と実質的な平等性を確保します。
- ・多様なステークホルダーの利益を考慮するとともに、適切な協働に努めます。
- ・当社に関する情報を適切に開示し、透明性を確保します。
- ・取締役及び監査役は、株主に対する受託者責任を認識し、その役割・責務を果たします。
- ・株主との間で建設的な対話を行います。

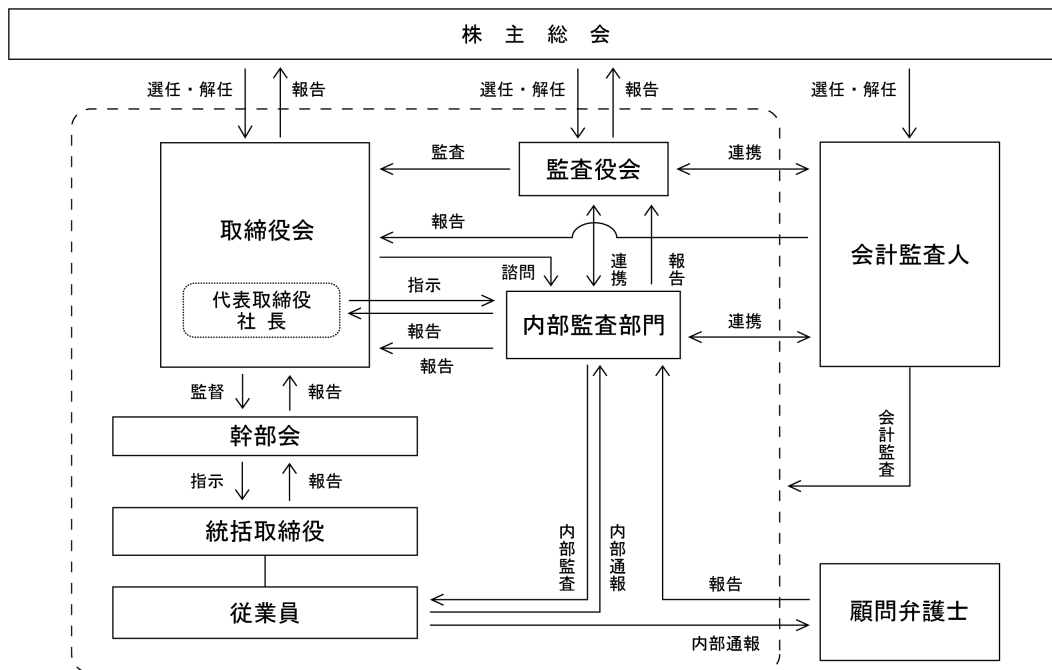
② 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は、監査役会設置会社モデルを採用しております。社外取締役2名を含む取締役7名（有価証券報告書提出日現在）で構成される取締役会では、経営上の重要な意思決定を行うとともに、経営監視にも意を注いでおります。監査役監査は社外監査役2名を含む監査役4名（有価証券報告書提出日現在）の体制をとっております。監査役は取締役会やその他の重要な経営会議への出席等を通して取締役の職務の執行を監督しております。

当社が監査役会設置会社を採用するのは、当社の規模・業態等に鑑みれば、監査役会設置会社の制度設計によっても取締役会・監査役（会）による経営監視は十分機能すると考えているからです。

なお、取締役会の議長は代表取締役社長である中島耕、監査役会の議長は常勤監査役である井上雅文がそれぞれ務めており、取締役会及び監査役会の構成員は後記(2)〔役員状況〕に記載のとおりであります。

また、当社のコーポレート・ガバナンス体制の模式図は、次のとおりであります。



③ 企業統治に関するその他の事項

a. 内部統制システム及びリスク管理体制の整備状況

当社では、当社及び関係会社が、業務の有効性、効率性の確保、法令の遵守及び財務報告の信頼性を確保する観点から、内部統制システム及びリスク管理体制を概ね次のとおり整備しております。

- ・ 当社の経営理念・行動指針に則った行動を促進するため、「SECカーボン:行動ガイドライン」を作成し、その浸透を図っております。
- ・ 権限と責任を明確にするため、職務権限規程や業務分掌規程を定めております。
- ・ リスクマネジメントに関しては、リスクマネジメント規程を定め、統括取締役がリスクを統轄するとともに、取締役会が選定する重要リスクについて、そのリスク管理状況を定期的にモニタリングする体制を整備しております。また、大規模な事故、災害等が発生した場合の対応として、危機管理規程・事業継続計画(BUSINESS CONTINUITY PLAN:BCP)を定め、緊急時対応の整備をするとともに、定期的に訓練を実施しております。
- ・ コンプライアンスに関しては、コンプライアンス規程を定め、統括取締役がコンプライアンスを統轄するとともに、取締役会が定める法令の遵守に関する方針等に基づき、定期的に教育研修等の施策を実施しております。さらに、法令の遵守に関する事前相談制度及び内部通報制度を設けて、自社自浄機能の補完に努めております。
- ・ 金融商品取引法に従い、財務報告に係る内部統制の整備を行うとともにその運用状況を含めて定期的に評価しております。
- ・ 購買決裁規程に暴力団排除条項を定め、警察や地元企業等と連携しながら、反社会的勢力との関係排除に努めております。
- ・ 当社及び関係会社がグループ内で安定成長を図るために、関係会社管理規程を定め、親会社・子会社間の報告連絡体制を確立する一方で、利益相反防止に必要な措置も講じてグループ全体の業務の適正確保を図っております。

b. 責任限定契約の内容の概要

当社は、社外取締役及び社外監査役との間で会社法第427条第1項の規定に基づく責任限定契約を締結しております。当該契約に基づく責任の限度額は、法令が定める額とする旨定款に定めております。

c. 役員等賠償責任保険契約の内容の概要

当社は、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険(以下、「D&O保険」といいます。)契約を保険会社との間で締結しており、これにより、取締役又は監査役が業務に起因して損害賠償責任を負った場合における損害(ただし、保険契約上で定められた免責事由に該当するものを除きます。)等を填補することとしております。なお、D&O保険の保険料は、全額を当社が負担しております。

D&O保険の契約期間は、1年間であり、当該期間の満了前に取締役会において決議の上、これを更新する予定であります。

d. 取締役の定数

当社の取締役は、9名以内とする旨定款に定めております。

e. 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び累積投票によらない旨定款に定めております。

f. 剰余金の配当等の決定機関

当社は、「剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めのある場合を除き、取締役会の決議によって定める。」旨を定款に定めております。取締役の任期を1年とした上で、当社の利益状況に適した配当水準及び時期を取締役に適宜判断することにより、当社の経営の成果を適切に株主に還元することが可能になると判断しております。

g. 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものです。

④ 取締役会の活動状況

当事業年度の取締役会は合計15回開催しております。個々の取締役の出席状況については次のとおりです。

氏名	出席率	出席／開催回数
代表取締役会長 大谷 民明	100%	15回／15回
代表取締役社長 中島 耕	100%	15回／15回
取締役 長谷川 和重	100%	15回／15回
取締役 田畑 洋	100%	15回／15回
取締役 岩井 清一	100%	15回／15回
社外取締役 大谷 壽一	93%	14回／15回
社外取締役 森 千春	100%	15回／15回

取締役会における具体的な検討内容として、決議事項・報告事項に関する社内規程に従い、当社の経営に関する基本方針、重要な業務執行に関する事項、法令および定款に定められた事項を決議します。また重要な業務の執行状況および法令に定められた事項の報告を受けます。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

a. 2026年6月19日（有価証券報告書提出日）現在の当社の役員の状況は、以下の通りです。

男性 9名 女性 2名 （役員のうち女性の比率 18.2%）

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
代表取締役会長	大谷 民明	1948年9月3日生	1969年5月 1993年3月 1993年6月 1997年6月 1999年6月 2002年9月 2005年6月 2018年5月	当社入社 当社総務部長 当社取締役総務部長 当社常務取締役総務部・経理部担当 当社専務取締役調査室・総務部・経理部担当 当社専務取締役調査・総務・経理部門統括 当社代表取締役社長 当社代表取締役会長(現任)	(注)4	600,000
代表取締役社長	中島 耕	1964年3月8日生	1986年4月 2014年3月 2016年6月 2016年8月 2016年11月 2017年5月 2018年2月 2018年5月	当社入社 当社京都工場業務部長 当社取締役生産部門担当、京都工場長、同工場業務部長 当社取締役生産部門担当、京都工場長 当社取締役京都工場長 当社常務取締役統括、京都工場長 当社常務取締役統括 当社代表取締役社長(現任)	(注)4	22,500
取締役	長谷川 和重	1967年8月15日生	1992年4月 2019年5月 2019年6月 2021年6月 2021年6月 2021年10月 2022年4月 2023年10月 2024年6月 2025年4月	三菱商事株式会社入社 同社より出向 当社執行役員電極ユニット長 三菱商事株式会社退職 当社取締役執行役員SK-Bユニット長兼電極ユニット長 当社取締役 営業部門、管理部門担当執行役員SK-Bユニット長兼電極ユニット長兼本社ユニット長 当社取締役 営業部門、原料調達部門、管理部門担当執行役員電極ユニット長兼原料調達室長 当社取締役 営業部門、原料調達部門、管理部門担当執行役員原料調達室長 当社取締役 営業部門、原料調達部門担当執行役員原料調達室長 当社取締役 京都工場、原料調達部門担当執行役員京都工場長兼原料調達室長(現任)	(注)4	2,500
取締役	田畑 洋	1969年10月24日生	1992年4月 2014年9月 2015年3月 2018年2月 2021年6月 2021年10月 2025年4月	当社入社 当社京都工場品質保証室長 当社京都工場技術部長 当社執行役員京都工場長 当社取締役執行役員京都工場長 当社取締役 京都工場担当執行役員京都工場長 当社取締役 営業部門担当執行役員(現任)	(注)4	2,500

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役	岩井 清 一	1966年3月29日生	2001年5月 2008年6月 2010年9月 2011年6月 2015年3月 2016年6月 2022年4月 2024年6月	当社入社 当社法務管理部長 当社法務管理部長兼総務部長 当社総務部長 当社経営企画室長 当社執行役員経営企画室長 当社執行役員経営企画室長兼本社ユニット長 当社取締役 経営企画部門、管理部門担当 執行役員経営企画室長兼本社ユニット長(現任)	(注)4	2,500
取締役	大谷 壽 一	1955年11月12日生	1994年6月 1997年6月 2003年3月 2003年6月 2007年6月	当社監査役 当社取締役 大谷製鉄㈱代表取締役社長(現任) 当社取締役退任 当社取締役(現任)	(注)4	10,000
取締役	森 千 春	1970年6月17日生	1994年4月 1997年6月 2005年1月 2005年2月 2023年6月	有恒監査法人(現 ひびき監査法人)入所 公認会計士登録 税理士登録 森千春会計事務所開設(現任) 当社取締役(現任)	(注)4	1,000
常勤監査役	井上 雅 文	1960年7月17日生	1983年4月 2010年9月 2016年11月 2017年5月 2018年5月 2019年6月	当社入社 当社国内電極営業部長 当社電極・SK-Bユニット電極営業部長 当社執行役員電極・SK-Bユニット長 当社執行役員電極ユニット長 当社監査役(現任)	(注)5	6,500
常勤監査役	森下 宏 也	1961年7月15日生	1985年4月 2012年6月 2020年12月 2021年6月	当社入社 当社経理部長 当社経理部担当部長 当社監査役(現任)	(注)6	5,000
監査役	岡 和 彦	1947年2月1日生	1975年4月 1986年9月 1993年8月 2006年6月	大阪弁護士会弁護士登録 岡法律事務所開設 当社顧問弁護士 当社監査役(現任)	(注)7	—
監査役	片岡 万 枝	1969年2月8日生	1991年10月 2006年4月 2017年12月 2019年1月 2021年8月 2024年6月	中央新光監査法人 入所(名称変更後：みずほ監査法人) 中央青山トランザクションサービス(現 PwCアドバイザー合同会社)へ転籍 三井物産株式会社 入社 EYトランザクション・アドバイザー・サービス株式会社 入社 片岡公認会計士事務所開設(現任) 当社監査役(現任)	(注)8	1,000
計						653,500

- (注) 1. 取締役大谷壽一と森千春は、社外取締役であります。
2. 監査役岡和彦と片岡万枝は、社外監査役であります。
3. 当社は取締役大谷壽一及び森千春、監査役岡和彦及び片岡万枝を東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。
4. 2025年6月26日開催の定時株主総会終結の時から2026年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。

5. 2023年6月29日開催の定時株主総会終結の時から2027年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
6. 2025年6月26日開催の定時株主総会終結の時から2029年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
7. 2022年6月29日開催の定時株主総会終結の時から2026年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
8. 2024年6月27日開催の定時株主総会終結の時から2028年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
9. 当社は、法令に定める監査役員数を欠くこととなる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴		所有株式数 (株)
目方研次	1961年8月16日生	1998年4月 2008年4月 2008年6月	大阪弁護士会弁護士登録 エヴィス法律会計事務所パートナー弁護士 当社補欠監査役(現任)	—

- b. 2026年6月26日開催予定の定時株主総会の議案(決議事項)として「取締役8名選任の件」及び「監査役1名選任の件」を提案しており、当該議案が承認可決されると、当社の役員状況は以下のとおりとなる予定です。

なお、当該定時株主総会の直後に開催が予定されている取締役会及び監査役会の決議事項の内容(役職等)も含めて記載しています。

男性 10名 女性 2名 (役員のうち女性の比率 16.7%)

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
代表取締役社長	中島 耕	1964年3月8日生	1986年4月 2014年3月 2016年6月 2016年8月 2016年11月 2017年5月 2018年2月 2018年5月	当社入社 当社京都工場業務部長 当社取締役生産部門担当、京都工場長、同工場業務部長 当社取締役生産部門担当、京都工場長 当社取締役京都工場長 当社常務取締役統括、京都工場長 当社常務取締役統括 当社代表取締役社長(現任)	(注)4	22,500
取締役会長	大谷 民明	1948年9月3日生	1969年5月 1993年3月 1993年6月 1997年6月 1999年6月 2002年9月 2005年6月 2018年5月 2026年6月	当社入社 当社総務部長 当社取締役総務部長 当社常務取締役総務部・経理部担当 当社専務取締役調査室・総務部・経理部担当 当社専務取締役調査・総務・経理部門統括 当社代表取締役社長 当社代表取締役会長 当社取締役会長(現任)	(注)4	600,000

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役	長谷川 和 重	1967年8月15日生	1992年4月 2019年5月 2019年6月 2021年6月 2021年6月 2021年10月 2022年4月 2023年10月 2024年6月 2025年4月	三菱商事株式会社入社 同社より出向 当社執行役員電極ユニット長 三菱商事株式会社退職 当社取締役執行役員SK-Bユニット長兼電極ユニット長 当社取締役 営業部門、管理部門担当執行役員SK-Bユニット長兼電極ユニット長兼本社ユニット長 当社取締役 営業部門、原料調達部門、管理部門担当執行役員電極ユニット長兼原料調達室長 当社取締役 営業部門、原料調達部門、管理部門担当執行役員原料調達室長 当社取締役 営業部門、原料調達部門担当執行役員原料調達室長 当社取締役 京都工場、原料調達部門担当執行役員京都工場長兼原料調達室長(現任)	(注)4	2,500
取締役	田 畑 洋	1969年10月24日生	1992年4月 2014年9月 2015年3月 2018年2月 2021年6月 2021年10月 2025年4月	当社入社 当社京都工場品質保証室長 当社京都工場技術部長 当社執行役員京都工場長 当社取締役執行役員京都工場長 当社取締役 京都工場担当執行役員京都工場長 当社取締役 営業部門担当執行役員(現任)	(注)4	2,500
取締役	岩 井 清 一	1966年3月29日生	2001年5月 2008年6月 2010年9月 2011年6月 2015年3月 2016年6月 2022年4月 2024年6月	当社入社 当社法務管理部長 当社法務管理部長兼総務部長 当社総務部長 当社経営企画室長 当社執行役員経営企画室長 当社執行役員経営企画室長兼本社ユニット長 当社取締役 経営企画部門、管理部門担当執行役員経営企画室長兼本社ユニット長(現任)	(注)4	2,500
取締役	森 千 春	1970年6月17日生	1994年4月 1997年6月 2005年1月 2005年2月 2023年6月	有恒監査法人(現 ひびき監査法人)入所 公認会計士登録 税理士登録 森千春会計事務所開設(現任) 当社取締役(現任)	(注)4	1,000

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役	合 田 光 広	1981年 5 月 22 日生	2007年 4 月 2010年 12 月 2022年 12 月 2025年 4 月 2026年 6 月	日興シテイグループ証券株式会社(現シテイグループ証券株式会社) 入社 日興コーディアル証券株式会社(現 S M B C 日興証券株式会社) 入社 ミナミホールディングス株式会社 経営企画室長(現任) D & G コンサルティング合同会社 開設 当社取締役(現任)	(注) 4	—
取締役	大 谷 昌 義	1985年 1 月 8 日生	2011年 4 月 2015年 3 月 2015年 5 月 2023年 3 月 2026年 6 月	当社入社 大谷製鉄株式会社取締役 関西興業株式会社取締役(現任) 大谷製鉄株式会社常務取締役(現任) 当社取締役(現任)	(注) 4	500
常勤監査役	井 上 雅 文	1960年 7 月 17 日生	1983年 4 月 2010年 9 月 2016年 11 月 2017年 5 月 2018年 5 月 2019年 6 月	当社入社 当社国内電極営業部長 当社電極・S K - B ユニット電極営業部長 当社執行役員電極・S K - B ユニット長 当社執行役員電極ユニット長 当社監査役(現任)	(注) 5	6, 500
常勤監査役	森 下 宏 也	1961年 7 月 15 日生	1985年 4 月 2012年 6 月 2020年 12 月 2021年 6 月	当社入社 当社経理部長 当社経理部担当部長 当社監査役(現任)	(注) 6	5, 000
監査役	片 岡 万 枝	1969年 2 月 8 日生	1991年 10 月 2006年 4 月 2017年 12 月 2019年 1 月 2021年 8 月 2024年 6 月	中央新光監査法人 入所(名称変更後：みすず監査法人) 中央青山トランザクションサービス(現 P w C アドバイザリー合同会社)へ転籍 三井物産株式会社 入社 EY トランザクション・アドバイザリー・サービス株式会社 入社 片岡公認会計士事務所開設(現任) 当社監査役(現任)	(注) 7	1, 000
監査役	瀧 洋 二 郎	1961年 10 月 1 日生	1984年 4 月 1995年 4 月 1995年 4 月 2016年 4 月 2018年 1 月 2018年 1 月 2018年 4 月 2026年 6 月	ミノルタカメラ株式会社(現 コニカミノルタ株式会社) 入社 大阪弁護士会弁護士登録 浅岡法律事務所(現 浅岡・瀧法律会計事務所) 入所 大阪弁護士会副会長 就任 浅岡・瀧法律会計事務所代表(現任) 株式会社公文教育研究会監査役(現任) 独立行政法人造幣局契約監視委員会委員(現任) 当社監査役(現任)	(注) 8	—
計						644, 000

- (注) 1. 取締役森千春、合田光広及び大谷昌義は、社外取締役であります。
2. 監査役片岡万枝と瀧洋二郎は、社外監査役であります。
3. 当社は取締役森千春、合田光広、大谷昌義及び監査役片岡万枝、瀧洋二郎を東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。
4. 2026年 6 月 26 日開催の定時株主総会終結の時から2027年 3 月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
5. 2023年 6 月 29 日開催の定時株主総会終結の時から2027年 3 月期に係る定時株主総会終結の時までであります。

6. 2025年6月26日開催の定時株主総会終結の時から2029年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
7. 2024年6月27日開催の定時株主総会終結の時から2028年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
8. 2026年6月26日開催の定時株主総会終結の時から2030年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
9. 当社は、法令に定める監査役員の数を欠くこととなる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴		所有株式数 (株)
目方研次	1961年8月16日生	1998年4月 2008年4月 2008年6月	大阪弁護士会弁護士登録 エヴィス法律会計事務所パートナー弁護士 当社補欠監査役(現任)	—

② 社外役員の状況

2026年6月19日（有価証券報告書提出日）現在の当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名です。

当社では、株式会社東京証券取引所が定める独立性の基準を満たすことを社外取締役及び社外監査役選任の要件としており、その前提で豊富な知識、経験に基づき客観的な視点から当社の経営等に対し、適切な意見を述べて頂ける方を選任しております。

当社の社外取締役である大谷壽一は、当社発行株式の19.85%を保有する大谷製鉄株式会社の代表取締役社長を務めております。当社は同社に対し、当社製品の販売を行っておりますが、当社製品全体の販売に占める同社の割合は約1.1%と僅かであり、当社経営陣より独立性を有していると判断しております。また、社外取締役である森千春と当社との間には、人的関係、資本的关系、取引関係その他の利害関係はありません。同氏は公認会計士であり、森千春会計事務所を開設しておりますが、当社と同事務所との間には特別な関係はありません。当該社外取締役を選任している理由としては、当社と単に無関係であればよいというわけではなく、法定の要件を備えた人物で、一定程度当社と当業界のことを熟知し、かつ、経営者としての豊富な知識、経験を生かし、経営陣より独立した客観的立場で取締役、業務執行取締役等の職務を監督することにより取締役会の機能強化を期待するためであります。

当社の社外監査役である岡和彦との間には、人的関係、資本的关系、取引関係その他の利害関係はありません。社外監査役である片岡万枝と当社との間には、人的関係、資本的关系、取引関係その他の利害関係はありません。同氏は公認会計士であり、片岡公認会計士事務所を開設しておりますが、当社と同事務所との間には特別な関係はありません。当該社外監査役を選任している理由としては、経営の監視のためであります。

2026年6月26日開催予定の定時株主総会の議案（決議事項）として「取締役8名選任の件」及び「監査役1名選任の件」を提案しており、当該議案が承認可決されると、当社の社外取締役は3名、社外監査役は2名となる予定です。新任社外取締役である合田光広と当社との間には、人的関係、資本的关系、取引関係その他の利害関係はありません。新任社外取締役である大谷昌義は、当社発行株式の19.85%を保有する大谷製鉄株式会社の常務取締役を務めております。当社は同社に対し、当社製品の販売を行っておりますが、当社製品全体の販売に占める同社の割合は約1.1%と僅かであり、当社経営陣より独立性を有していると判断しております。新任社外監査役である瀧洋二郎との間には、人的関係、資本的关系、取引関係その他の利害関係はありません。

なお、社外取締役及び社外監査役による当社株式の保有は、「①役員一覧」の「所有株式数」欄に記載のとおりであります。

③ 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査活動においては、必要に応じて内部監査部門、監査役及び会計監査人との相互連携を行い、経営効率の向上と経営の健全性の維持・強化を図っております。

(3) 【監査の状況】

① 監査役監査の状況

当社の監査役会は、常勤監査役2名、社外監査役2名の計4名で構成されております。監査役会議長は、常勤監査役である井上雅文が務めております。

当事業年度に開催した監査役会の出席率は以下の通りであります。なお、監査役会の平均所要時間は約1時間でした。

氏名	出席率	出席／開催回数
常勤監査役 井上 雅文	100%	14回／14回
常勤監査役 森下 宏也	100%	14回／14回
社外監査役 岡 和彦	100%	14回／14回
社外監査役 片岡 万枝	100%	14回／14回

各監査役は、期首に定めた監査方針、監査計画に基づき、取締役会その他重要会議に出席し、重要書類の閲覧、取締役等への業務執行状況のヒヤリング等を通じ、独立した立場から職務執行状況の監査を実施しております。また、会計監査人から監査計画、監査体制の説明を受けるほか、実地棚卸等の立会い、会計監査結果報告等の受領、情報交換等を行う会合を実施し、会計監査人との連携を図っております。

監査役会では、4名の監査役と代表取締役との意見交換会を3ヶ月に1回、当事業年度は4回実施しております。その他、常勤監査役は、内部監査部門である経営企画室とも相互連携を行い、適切な監査の実施に努めております。

② 内部監査の状況

当社における内部監査は、代表取締役社長の直接指揮を受けた経営企画室(監査担当は室長を含め8名で構成)が実施しております。代表取締役社長の内部監査に関する基本方針に基づき、経営企画室が年間の監査計画を立案し、代表取締役社長承認後に計画に従って監査を実施しております。内部監査結果については、経営企画室長が代表取締役社長に報告後、すみやかに取締役会・監査役会に対して、同報告内容を共有しております。被監査部門の改善状況については、フォローアップ監査を実施し、是正措置の定着状況を確認しています。

内部監査においては、必要に応じて監査役及び会計監査人と調整・連携を行い、適正な監査の実施に努めております。

③ 会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

b. 継続監査期間

2008年3月期以降

c. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 鈴木 朋之

指定有限責任社員 業務執行社員 福岡 宏之

d. 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士 11名

その他 10名

e. 監査法人の決定方針と理由

当社は、会計監査人の決定に際しては、当社の業務内容に対応して効率的な監査業務を実施することができる一定の規模とネットワークを持つこと、審査体制が整備されていること、監査日数、監査期間及び具体的な監査実施要領並びに監査費用が合理的かつ妥当であること、さらに監査実績等により総合的に判断いたします。

また、監査役会は、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合には、会計監査人の解任又は不再任に関する株主総会の議案の内容を決定することといたします。

会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合には、監査役会は監査役全員の同意に基づき、会計監査人を解任いたします。

f. 監査役会による監査法人の評価

日本監査役協会が公表する「会計監査人の評価及び選定基準策定に関する監査役等の実務指針」に基づき、監査法人の評価を行った結果、指摘すべき事項はありません。

④ 監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	26	—	28	—
連結子会社	—	—	—	—
計	26	—	28	—

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬（a. を除く）

該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

該当事項はありません。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、会計監査人の監査項目別監査時間及び監査報酬の推移並びに監査計画の実績の状況を確認し、監査時間及び報酬額の妥当性を検討した結果、会計監査人の報酬等について、同意の判断を行っております。

(4) 【役員報酬等】

① 役員報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は役員報酬の算定および決定において、役職ごとの役割の大きさや責任の範囲に相応しいものであること、当社の企業価値向上と更なる持続的な成長に向けた動機付けとなること、報酬決定の手続きに客観性・透明性が担保されていることを基本方針としております。

そして、その概要は次のとおりです。

a. 取締役の個人別の報酬の内容の決定に関する方針

- 業績連動報酬に係る業績指標の内容及び業績連動報酬の額又は数の算定方法の決定方針

業績連動報酬算定の指標は、前期連結営業利益とし、営業利益額の達成幅に応じ予め取締役会にて決定した取締役の役職別報酬表に基づき業績連動報酬の額を決定しております。

なお、その指標を選択した理由は、業績との連動性が高く、客観的な判断が可能と判断したためです。

- 報酬等の種類ごとの割合の決定方針

上記役職別報酬表では、基本報酬(固定)部分と業績連動報酬(変動)部分に区分し、個人別の報酬合計額に占める業績連動報酬部分の割合について約30%を上限に設定しております。

- 報酬を与える時期又は条件の決定方針

定時株主総会終了後の取締役会で審議・決定する取締役任期中の定額報酬を翌月25日までに金銭で付与するものとします。

- 当事業年度における当該業績連動報酬に係る指標の目標と実績

当事業年度の目標は、2025年5月14日時点の業績予想において連結営業利益を3,900百万円としておりましたが、実績は4,008百万円となりました。

b. 取締役及び監査役の報酬等についての株主総会の決議に関する事項

- 取締役の金銭報酬の額は、2024年6月27日開催の第104回定時株主総会において年額270百万円以内(うち社外取締役は30百万円以内)と決議されております。

当該定時株主総会終結時点の取締役の員数は7名です。

- 監査役の金銭報酬の額は、2024年6月27日開催の第104回定時株主総会において年額50百万円以内と決議されております。

当該定時株主総会終結時点の監査役の員数は4名です。

c. 役員個人別の報酬等の内容の決定に係る委任に関する事項

当社は、取締役の個人別報酬額の具体的内容を取締役会で、監査役の個人別報酬額の具体的内容を監査役会でそれぞれ審議の上決定しておりますので、委任に関する事項はありません。

また、取締役報酬の決定はその決定内容が予め決定された役職別報酬表に基づき決定されることから、取締役の個人別の報酬の内容の決定に関する方針に沿っていると取締役会は判断しております。

② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる 役員の員数 (名)
		固定 報酬	業績連動 報酬	非金銭報酬	
取締役 (社外取締役を除く)	169	120	49	—	5
監査役 (社外監査役を除く)	30	30	—	—	2
社外役員	33	30	3	—	4

(注) 1 使用人兼務部分に対する報酬を含めております。

2 各取締役の報酬額は、株主総会で決められた上限額の範囲内で取締役会の決議により各取締役の役位等を踏まえて決定します。各監査役の報酬額は、株主総会で決められた上限額の範囲内で監査役会の協議により各監査役の役位等を踏まえて決定します。

③ 役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が100百万円以上である者が存在しないため、記載していません。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、株式の価値の変動または株式に係る配当によって利益を受けることを主目的として保有する株式を純投資目的で保有する株式とし、純投資以外の目的で保有する株式と区分しております。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、株式を保有することによる取引・協力関係の維持、強化について、中長期的な視点から総合的に勘案し、事業戦略上、必要と判断する株式を保有する事としております。

当社は、毎年、取締役会で、保有する全ての株式について、株式保有の意義やその採算性、ならびに保有に伴うリスクが資本コストに見合っているかを個別に検証し、保有適否を決定しております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	5	10
非上場株式以外の株式	31	25,638

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	—	—	—
非上場株式以外の株式	7	38	持株会による定期購入

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	—	—
非上場株式以外の株式	3	177

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
大和工業(株)	1,307,000	1,307,000	販売取引先との関係の維持強化	有
	15,697	10,335		
日本カーボン(株)	444,200	444,200	黒鉛電極の品質改善等を目的とする資本業務提携	有
	1,985	1,852		
住友電気工業(株)	203,000	203,000	購買等取引先との関係の維持強化	無
	1,701	500		
NTT(株)	6,930,000	7,730,000	保有の合理性が僅少と判断し、当事業年度において一部売却済	無
	1,089	1,118		
三菱商事(株)	204,600	204,600	販売及び購買取引先との関係の維持強化	有
	1,087	537		
(株)三菱UFJフ ィナンシャル・ グループ	225,000	225,000	金融取引先との関係の維持強化	無
	585	452		
ダイダン(株)	170,000	58,000	保有の合理性が僅少と判断し、提出日現在において売却済	無
	445	215		
トピー工業(株)	150,685	143,848	販売取引先との関係の維持強化 持株会による定期購入	無
	436	305		
日本製鉄(株)	685,889	136,331	販売取引先との関係の維持強化 持株会による定期購入	無
	395	435		
中部鋼鈹(株)	132,420	130,897	販売取引先との関係の維持強化 持株会による定期購入	有
	321	276		
(株)みずほフィ ィナンシャルグ ループ	44,800	44,800	金融取引先との関係の維持強化	無
	272	181		
大同特殊鋼(株)	142,506	137,197	販売取引先との関係の維持強化 持株会による定期購入	無
	258	163		
ナカバヤシ(株)	361,000	361,000	購買等取引先との関係の維持強化	有
	211	184		
住友商事(株)	36,000	36,000	販売及び購買取引先との関係の維持強化	有
	208	121		
(株)京都フィ ィナンシャル グループ	45,600	45,600	金融取引先との関係の維持強化	無
	185	103		
伊藤忠商事(株)	60,000	12,000	販売取引先との関係の維持強化	無
	118	82		
合同製鐵(株)	30,001	29,082	販売取引先との関係の維持強化 持株会による定期購入	無
	109	112		
日亜鋼業(株)	252,000	252,000	購買等取引先との関係の維持強化	有
	92	78		
JFEホール ディングス(株)	44,400	44,400	販売及び購買取引先との関係の維持強化	無
	80	81		
(株)T&Dホ ールディン グス	20,000	20,000	保有の合理性が僅少と判断し、提出日現在において売却済	無
	79	63		
日本冶金工業(株)	14,191	13,307	販売取引先との関係の維持強化 持株会による定期購入	無
	65	55		
(株)ケー・エ フ・シー	36,000	36,000	保有の合理性が僅少と判断し、提出日現在において一部売却済	有
	56	48		
ENEOSホ ールディン グス(株)	31,030	31,030	購買等取引先との関係の維持強化	無
	43	24		
(株)四国銀行	10,700	10,700	金融取引先との関係の維持強化	有
	24	12		
櫻島埠頭(株)	10,000	10,000	購買等取引先との関係の維持強化	有
	23	17		
三菱製鋼(株)	10,000	10,000	販売取引先との関係の維持強化	無
	17	16		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
エア・ウォーター(株)	8,000	8,000	販売取引先との関係の維持強化	無
	16	15		
神鋼商事(株)	6,403	2,053	販売及び購買取引先との関係の維持強化 持株会による定期購入	無
	14	11		
双日(株)	2,100	2,100	保有の合理性が僅少と判断し、提出日現在において売却済	無
	12	6		
東海東京フィナンシャル・ホールディングス(株)	2,000	2,000	保有の合理性が僅少と判断し、提出日現在において売却済	無
	1	0		
東海カーボン(株)	1,000	1,000	販売取引先との関係の維持強化	無
	0	0		
(株)中央倉庫	—	21,000	—	—
	—	29		

(注) 1 当該株式につき、定量的な保有効果の算出は困難ですが、取締役会で株式保有の意義やその採算性、ならびに保有に伴うリスクが資本コストに見合っているかを個別に検証することにより、保有の合理性を確保しております。

2 貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下の銘柄も含めて記載しております。

3 「—」は該当銘柄を保有していないことを示しております。

4 神鋼商事株式会社は、2025年4月1日付で普通株式1株につき3株の割合で株式分割しております。

5 日本電信電話株式会社は、2025年7月1日付でNTT株式会社に社名変更しております。

6 日本製鉄株式会社は、2025年10月1日付で普通株式1株につき5株の割合で株式分割しております。

7 ダイダン株式会社は、2026年1月1日付で普通株式1株につき3株の割合で株式分割しております。

8 伊藤忠商事株式会社は、2026年1月1日付で普通株式1株につき5株の割合で株式分割しております。

③ 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

④ 当事業年度に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

⑤ 当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

5 【従業員の状況等】

(1) 【人材戦略に関する基本方針等】

当社グループの人材戦略は、中長期経営方針「2030 Make Real」の実現に向け、成長戦略の強化および経営体質の強化を支える重要な経営基盤として、人材を重要な経営資本と位置付けています。事業環境の変化や技術革新への対応力を高め、持続的な企業価値向上を実現するため、多様な人材の確保・育成・活躍促進を通じて組織力およびモノづくり力の強化を図っております。

人材育成方針については、「求める人材要件」を定義し、OJT、Off-JT、教育研修、資格取得支援等を通じて、従業員一人ひとりの能力向上および自律的な成長を支援しております。また、熟練社員が有する知識・技能の継承を推進するとともに、変化する事業環境に柔軟に対応できる人材の育成に取り組んでおります。

社内環境整備方針については、多様な人材が能力を最大限発揮できる職場環境の整備を推進しております。女性の活躍推進、公平性および透明性を重視した人事制度の運用、安全で働きやすい職場環境の整備、ワークライフバランスの推進等を通じて、従業員が長期的に活躍できる環境づくりに取り組んでおります。

また、当社グループにおける従業員の給与その他の給与の額及び内容については、持続的な企業価値向上に向けた人材戦略の実現を目的として、職務・役割、能力、成果および会社業績等を総合的に勘案した人事・処遇制度に基づき決定しております。

(2) 【従業員の状況】

① 連結会社の状況

当社グループ（当社及び連結子会社）は、炭素製品の製造・販売を主な事業とする単一セグメントであるため、事業所別に記載しております。

2026年3月31日現在

事業所の名称	従業員数(名)
本社（東京事務所、名古屋営業所含む）	49
京都工場	207
岡山工場	23
その他	3
合計	282

(注) 従業員数は就業人員数（当社グループからグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む。）であります。

② 提出会社の状況

当社は、炭素製品の製造・販売を主な事業とする単一セグメントであるため、事業所別に記載しております。

2026年3月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)	平均年間給与の対前事業年度増減率(%)
279	43.0	18.0	7,766,222	△0.5

事業所の名称	従業員数(名)
本社（東京事務所、名古屋営業所含む）	49
京都工場	207
岡山工場	23
合計	279

(注) 1 従業員数は就業人員数（当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。）であります。
2 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

③ 労働組合の状況

当社には全国繊維化学食品流通サービス一般労働組合同盟に属する「SECカーボン労働組合」が組織されており、組合員数は211人です。

連結子会社は、労働組合が組織されていません。

なお、労使関係について特に記載すべき事項はありません。

④ 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

提出会社

当事業年度				
管理職に占める女性労働者の割合(%) (注1)	男性労働者の育児休業取得率(%) (注2)	労働者の男女の賃金の差異(注1)		
		全労働者	正規雇用労働者	パート・有期労働者
1.9	63.6	71.1	77.0	79.9

(注) 1 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。

2 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の6第1号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2025年4月1日から2026年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2025年4月1日から2026年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組を行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、また、監査法人等が主催するセミナーへの参加や会計専門誌の定期購読等を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	17,420	17,533
受取手形及び売掛金	※1 9,266	※1 9,378
商品及び製品	1,897	3,193
仕掛品	13,038	11,766
原材料及び貯蔵品	2,917	3,293
その他	1,306	518
貸倒引当金	△22	△21
流動資産合計	45,824	45,663
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	15,278	16,368
減価償却累計額	△10,495	△10,916
建物及び構築物（純額）	4,782	5,451
機械装置及び運搬具	45,203	48,159
減価償却累計額	△42,211	△43,208
機械装置及び運搬具（純額）	2,993	4,950
工具、器具及び備品	910	927
減価償却累計額	△838	△848
工具、器具及び備品（純額）	71	79
土地	1,262	1,262
リース資産	9	25
減価償却累計額	△1	△6
リース資産（純額）	7	19
建設仮勘定	8,505	1,552
有形固定資産合計	17,623	13,316
無形固定資産	46	55
投資その他の資産		
投資有価証券	※2 17,724	※2 27,813
その他	185	176
貸倒引当金	△9	△9
投資その他の資産合計	17,900	27,980
固定資産合計	35,570	41,353
資産合計	81,395	87,016

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	1,586	1,934
リース債務	2	8
未払法人税等	370	863
未払消費税等	9	-
賞与引当金	363	329
その他	1,113	1,638
流動負債合計	3,446	4,775
固定負債		
リース債務	7	25
長期未払金	31	31
繰延税金負債	3,601	4,451
退職給付に係る負債	507	104
固定負債合計	4,147	4,613
負債合計	7,593	9,388
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,913	5,913
資本剰余金	5,247	5,247
利益剰余金	54,701	52,621
自己株式	△1,336	△1,336
株主資本合計	64,525	62,446
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	9,250	14,924
退職給付に係る調整累計額	11	243
その他の包括利益累計額合計	9,262	15,167
非支配株主持分	13	14
純資産合計	73,801	77,628
負債純資産合計	81,395	87,016

② 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
売上高	※1 31,179	※1 25,101
売上原価	※2 20,086	※2 17,279
売上総利益	11,092	7,821
販売費及び一般管理費	※3,※4 4,269	※3,※4 3,813
営業利益	6,823	4,008
営業外収益		
受取利息	68	131
受取配当金	891	845
不動産賃貸料	50	54
為替差益	-	189
助成金収入	26	445
雑収入	51	49
営業外収益合計	1,088	1,716
営業外費用		
持分法による投資損失	-	16
不動産賃貸原価	7	7
為替差損	170	-
租税公課	12	10
雑支出	4	6
営業外費用合計	195	41
経常利益	7,716	5,683
特別利益		
投資有価証券売却益	500	133
特別利益合計	500	133
特別損失		
固定資産除却損	※5 46	※5 95
投資有価証券評価損	-	※6 81
減損損失	-	※7 6,063
特別損失合計	46	6,240
税金等調整前当期純利益 又は税金等調整前当期純損失 (△)	8,170	△423
法人税、住民税及び事業税	2,172	1,502
法人税等調整額	244	△1,852
法人税等合計	2,417	△349
当期純利益又は当期純損失 (△)	5,752	△73
非支配株主に帰属する当期純利益	2	1
親会社株主に帰属する当期純利益 又は親会社株主に帰属する当期純損失 (△)	5,750	△74

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
当期純利益又は当期純損失 (△)	5,752	△73
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△1,847	5,673
退職給付に係る調整額	△10	231
その他の包括利益合計	※ △1,857	※ 5,904
包括利益	3,895	5,831
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	3,892	5,830
非支配株主に係る包括利益	2	1

③ 【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	5,913	5,246	51,294	△692	61,762
当期変動額					
剰余金の配当			△2,343		△2,343
親会社株主に帰属する 当期純利益			5,750		5,750
自己株式の取得				△643	△643
自己株式の処分		0		0	0
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	0	3,406	△643	2,763
当期末残高	5,913	5,247	54,701	△1,336	64,525

	その他の包括利益累計額			非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利益 累計額合計		
当期首残高	11,098	22	11,120	11	72,894
当期変動額					
剰余金の配当					△2,343
親会社株主に帰属する 当期純利益					5,750
自己株式の取得					△643
自己株式の処分					0
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	△1,847	△10	△1,857	2	△1,855
当期変動額合計	△1,847	△10	△1,857	2	907
当期末残高	9,250	11	9,262	13	73,801

当連結会計年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	5,913	5,247	54,701	△1,336	64,525
当期変動額					
剰余金の配当			△2,004		△2,004
親会社株主に帰属する 当期純損失(△)			△74		△74
自己株式の取得				△0	△0
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	-	△2,079	△0	△2,079
当期末残高	5,913	5,247	52,621	△1,336	62,446

	その他の包括利益累計額			非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利益 累計額合計		
当期首残高	9,250	11	9,262	13	73,801
当期変動額					
剰余金の配当					△2,004
親会社株主に帰属する 当期純損失(△)					△74
自己株式の取得					△0
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	5,673	231	5,904	0	5,905
当期変動額合計	5,673	231	5,904	0	3,826
当期末残高	14,924	243	15,167	14	77,628

④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益 又は税金等調整前当期純損失 (△)	8,170	△423
減価償却費	1,304	2,048
減損損失	-	6,063
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	△4	△1
賞与引当金の増減額 (△は減少)	5	△34
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	△68	△64
受取利息及び受取配当金	△960	△977
助成金収入	△26	△445
為替差損益 (△は益)	507	73
持分法による投資損益 (△は益)	-	16
投資有価証券評価損益 (△は益)	-	81
投資有価証券売却損益 (△は益)	△500	△133
固定資産除却損	46	95
売上債権の増減額 (△は増加)	4,166	△112
棚卸資産の増減額 (△は増加)	854	△399
仕入債務の増減額 (△は減少)	△2,534	348
未払消費税等の増減額 (△は減少)	△832	△9
未収消費税等の増減額 (△は増加)	△812	799
その他	△1,598	530
小計	7,717	7,454
利息及び配当金の受取額	947	940
助成金の受取額	26	445
法人税等の支払額	△4,142	△1,073
営業活動によるキャッシュ・フロー	4,548	7,766
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△14,350	△20,020
定期預金の払戻による収入	14,920	18,450
有形固定資産の取得による支出	△6,549	△3,567
無形固定資産の取得による支出	△14	△33
投資有価証券の取得による支出	△40	△1,959
投資有価証券の売却による収入	635	177
その他	△5	△185
投資活動によるキャッシュ・フロー	△5,404	△7,139
財務活動によるキャッシュ・フロー		
自己株式の純増減額 (△は増加)	△643	△0
配当金の支払額	△2,342	△2,004
非支配株主への配当金の支払額	△0	△0
リース債務の返済による支出	△3	△7
財務活動によるキャッシュ・フロー	△2,989	△2,011
現金及び現金同等物に係る換算差額	△507	△73
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△4,353	△1,457
現金及び現金同等物の期首残高	9,424	5,070
現金及び現金同等物の期末残高	※ 5,070	※ 3,613

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 1社

連結子会社は、東邦カーボン㈱であります。

(2) 非連結子会社の数 2社

非連結子会社は、SECファーンネス㈱、アイ'エムセップ㈱であります。

(3) 非連結子会社について連結の範囲から除いた理由

非連結子会社の2社は小規模会社であり、合計の総資産、売上高、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等はいずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないためであります。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した関連会社の数 1社

持分法を適用した関連会社は、日本電極㈱であります。

当連結会計年度において、日本電極㈱の株式を取得し、同社を持分法適用の範囲に含めております。

(2) 持分法を適用しない非連結子会社及び関連会社の名称

会社等の名称

(非連結子会社) SECファーンネス㈱

アイ'エムセップ㈱

(関連会社) ㈱ハイテンプ・マテリアルズ・システム

(3) 持分法を適用していない理由

持分法を適用していない会社は、それぞれ当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等に及ぼす影響が軽微であり、かつ全体としても重要性がないため、これらの会社に対する投資勘定については、持分法を適用せず原価法により評価しております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社である東邦カーボン㈱の決算日は、12月31日であります。

連結財務諸表の作成にあたっては、同日現在の財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は主として移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

主として移動平均法による原価法

② デリバティブ

時価法

③ 棚卸資産

主として総平均法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産（リース資産を除く） 定率法（ただし、岡山工場については、定額法）

1998年4月1日以降取得した建物（建物附属設備は除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

② 無形固定資産（リース資産を除く） 定額法

なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

ただし、ソフトウェア（自社利用分）については、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権は、貸倒実績率法によっており、貸倒懸念債権及び破産更生債権等は、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

② 数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定率法により按分した額をそれぞれ発生の日翌連結会計年度から費用処理することとしております。

未認識数理計算上の差異については、税効果を調整の上、純資産の部におけるその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に計上しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

当社グループは、炭素製品の製造・販売を主な事業としており、その履行義務は、製品の販売です。

これは、財又はサービスが引き渡される一時点で充足される履行義務であり、国内取引においては、製品の出荷時点から当該製品の支配が顧客に移転されるまでの期間が、国内における出荷及び配送に要する日数に照らして合理的と考えられる日数であることから、「収益認識に関する会計基準の適用指針」第98項を適用し、製品の出荷時点で収益を認識しております。

輸出取引においては、インコタームズ等で定められた貿易条件に基づきリスク負担が顧客に移転した時点で収益を認識しております。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

(7) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

予定取引に係る為替予約等に関して、繰延ヘッジ処理を採用しております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

外貨建取引（金銭債権債務及び外貨建予定取引）の為替変動リスクに対して為替予約取引等をヘッジ手段として用いております。

③ ヘッジ方針

為替予約等は通常の取引の範囲内で、外貨建営業債権債務に係る将来の為替レート変動リスクを回避する目的で為替予約取引等を行っております。為替予約取引等は通常の外貨建売上債権に係る輸出実績等を踏まえ、必要な範囲で実施しております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ手段及びヘッジ対象について、個々の取引毎のヘッジの有効性を評価しておりますが、ヘッジ対象となる外貨建取引と為替予約取引等について、通貨、金額、期間等の条件が同一の場合は、ヘッジの有効性が極めて高いことから評価を省略しております。

⑤ その他リスク管理方法のうちヘッジ会計に係るもの

当社の為替予約取引等は、社内規程に基づき、基本方針について代表取締役の承認を得て、経理部が営業各部署の入金予定及び為替レートを検討したうえで実行しております。また、その管理は経理部が営業各部署より販売契約残高の報告を求め商社及び金融機関からの残高通知書との照合及び実需との確認を行うとともに、毎月の取引実績を役員会へ報告しております。

また、経営企画室も内部監査等を実施し、リスク管理に努めております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(重要な会計上の見積り)

1 棚卸資産の評価

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
商品及び製品	1,897	3,193
仕掛品	13,038	11,766
原材料及び貯蔵品	2,917	3,293

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社グループは、棚卸資産の評価に関する会計基準に従い、収益性の低下により正味売却価額が帳簿価額を下回っている棚卸資産の帳簿価額を、正味売却価額まで切り下げる会計処理を適用しております。

会計処理の適用にあたっては、基本的には決算月における実績の販売価格から直接販売費を控除した正味売却価額と簿価との比較により評価損の金額を計算しておりますが、市況の著しい変化等により期末日以降に販売価格の重要な変動があった場合には、契約書など客観的情報に基づいて正味売却価額に反映させております。

当社グループの製品の生産リードタイムは比較的長く、このため棚卸資産残高は多額となっております。また、製品の販売価格や原材料の購入価格は、景気変動等による市場の需給状況に応じて大きく上下するという特徴があります。特に原材料の市場価格下落局面においては、下落前に仕入れた原材料を使用し製造した製品を販売する時にはすでに販売価格が大きく下降している場合もあり、棚卸資産の評価損が多額になる可能性があります。

2 固定資産の評価

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
有形固定資産	17,623	13,316
無形固定資産	46	55
減損損失	—	6,063

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

① 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額の算出方法

当社グループは、固定資産の減損損失の検討に際し、管理会計上の区分をグルーピングの単位としております。

当社及び連結子会社の固定資産について、減損の兆候があると認められる場合には、割引前将来キャッシュ・フローが帳簿価額を下回るかどうか検証し、減損損失の認識の要否を判定いたします。判定の結果、割引前将来キャッシュ・フローが帳簿価額を下回り減損損失の認識が必要と判断された場合、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、その減少額を減損損失として計上しております。

当連結会計年度において、人造黒鉛電極の生産に係る固定資産について、減損の兆候があると判断し、当該資産グループの回収可能価額がその帳簿価額を下回ったことから、減損損失6,063百万円を計上しております。なお、回収可能価額は使用価値により測定しており、将来キャッシュ・フローに基づく使用価値がマイナスとなる資産については、使用価値をゼロとして評価しております。

② 算出に用いた主要な仮定

使用価値については、経営者が承認した事業計画（翌期予算）等を用いており、将来キャッシュ・フローの見積りにあたって用いた主要な仮定は、売上高、売上原価及び販売費及び一般管理費等の見込額です。

③ 翌連結会計年度の連結財務諸表に与える影響

見積りの前提とした条件や仮定に変更が生じた場合は、固定資産の金額に重要な影響を与える可能性があります。

(未適用の会計基準等)

- ・「リースに関する会計基準」(企業会計基準第34号 2024年9月13日)
- ・「リースに関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第33号 2024年9月13日)

ほか、関連する企業会計基準、企業会計基準適用指針、実務対応報告及び移管指針の改正

(1) 概要

国際的な会計基準と同様に、借手のすべてのリースについて資産・負債を計上する等の取扱いを定めるもの。

(2) 適用予定日

2028年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(連結貸借対照表関係)

※1 受取手形及び売掛金のうち、顧客との契約から生じた債権の金額は、それぞれ以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
受取手形	252百万円	216百万円
売掛金	9,013	9,161

※2 非連結子会社及び関連会社に係る注記

各科目に含まれている非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
投資有価証券(株式)	120百万円	1,944百万円

3 保証債務

連結会社以外の会社の金融機関等からの借入金に対して、次のとおり債務保証を行っております。

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
アイ'エムセップ(株)	13百万円	アイ'エムセップ(株) 9百万円

(連結損益計算書関係)

※1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「注記事項（収益認識関係） 1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報」に記載しております。

※2 通常の販売目的で保有する棚卸資産の収益性の低下による簿価切下額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
売上原価(△は戻入額)	635百万円	△91百万円

※3 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
荷造費、運賃及び保管料	1,124百万円	913百万円
販売手数料	1,061	799
給料、諸手当(役員報酬含む)	601	622
賞与引当金繰入額	84	75
退職給付費用	22	22
研究開発費	555	573

※4 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
	555百万円	573百万円

※5 固定資産除却損の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
建物及び構築物	8百万円	0百万円
機械装置及び運搬具	37	93
工具、器具及び備品	0	0
無形固定資産	—	0
合計	46百万円	95百万円

※6 投資有価証券評価損

前連結会計年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

投資有価証券評価損81百万円は、当社グループの非連結子会社であるアイ'エムセップ(株)に対するものであります。

※7 減損損失

前連結会計年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

当連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しております。

(1) 減損損失を認識した資産

用途	種類	場所	減損損失(百万円)
人造黒鉛電極製造設備	建物及び構築物、機械装置及び運搬具、建設仮勘定等	SECカーボン(株) (京都府福知山市)	6,063

(2) 減損損失の認識に至った経緯

市場環境の変化により、回収可能価額が帳簿価額を下回ったことから減損損失を認識しております。

(3) 減損損失の金額と種類ごとの内訳

建物及び構築物	2,855	百万円
機械装置及び運搬具	3,021	
工具、器具及び備品	9	
リース資産	4	
建設仮勘定	169	
無形固定資産	3	

(4) 資産のグルーピングの方法

概ね独立したキャッシュ・フローを生み出す最小の単位にて資産のグルーピングを行っております。

(5) 回収可能価額の算定方法

当社グループの人造黒鉛電極製造設備については、回収可能価額は使用価値により測定しており、回収可能価額はゼロと算定しております。

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額並びに法人税等及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	△1,989百万円	8,404百万円
組替調整額	△500	△133
法人税等及び税効果調整前	△2,489	8,270
法人税等及び税効果額	642	△2,597
その他有価証券評価差額金	△1,847	5,673
退職給付に係る調整額		
当期発生額	△8	341
組替調整額	△6	△3
法人税等及び税効果調整前	△15	337
法人税等及び税効果額	4	△106
退職給付に係る調整額	△10	231
その他の包括利益合計	△1,857百万円	5,904百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	20,694,340	—	—	20,694,340

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	371,579	275,065	50	646,594

(変動事由の概要)

増減数の内訳は、次のとおりであります。

2024年6月11日付の取締役会決議による自己株式の取得による増加	155,000株
2024年9月9日付の取締役会決議による自己株式の取得による増加	120,000株
単元未満株式の買取りによる増加	65株
単元未満株式の買増請求による減少	50株

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2024年5月14日 取締役会	普通株式	1,341	66	2024年3月31日	2024年6月7日
2024年11月13日 取締役会	普通株式	1,002	50	2024年9月30日	2024年12月4日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2025年5月14日 取締役会	普通株式	利益剰余金	1,002	50	2025年3月31日	2025年6月9日

当連結会計年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	20,694,340	—	—	20,694,340

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	646,594	101	—	646,695

(変動事由の概要)

増減数の内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の買取りによる増加

101株

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2025年5月14日 取締役会	普通株式	1,002	50	2025年3月31日	2025年6月9日
2025年11月13日 取締役会	普通株式	1,002	50	2025年9月30日	2025年12月8日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2026年5月14日 取締役会	普通株式	利益剰余金	1,002	50	2026年3月31日	2026年6月8日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
現金及び預金勘定	17,420百万円	17,533百万円
預入期間が3ヶ月超の定期預金	△12,350	△13,920
現金及び現金同等物	5,070百万円	3,613百万円

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

・有形固定資産

主として、汎用コンピューター（工具、器具及び備品）であります。

(2) リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法によっております。

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
1年以内	44百万円	75百万円
1年超	77	162
合計	122百万円	237百万円

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については基本的に安全性の高い金融資産で運用し、資金調達については運転資金及び設備投資資金等の資金需要に応じて銀行借入を行う方針であります。また、デリバティブ取引については、外貨建売上債権の為替の変動リスクを回避するために、為替予約取引等を行っており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

受取手形及び売掛金は、取引先の信用リスクに晒されております。当該リスクについては、取引先ごとに与信管理、期日管理及び残高管理を行うとともに、取引先の財務状況の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。外貨建売上債権は、為替の変動リスクに晒されております。当該リスクについては、為替予約取引等を利用してヘッジしております。

投資有価証券は、市場価格の変動リスクに晒されております。主に業務上の関係を有する企業の株式であり、定期的に時価の把握を行っております。

買掛金、未払法人税等、未払消費税等は、1年以内の支払期日のものであります。これらの負債は資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）に晒されておりますが、当社グループでは適時に資金繰り計画を作成及び更新し当該リスクを管理しております。

デリバティブ取引については、外貨建売上債権の為替の変動リスクを回避するために、為替予約取引等を行っております。為替予約取引等は、社内規程に基づき、基本方針について代表取締役の承認を得て、経理部が営業各部作成の入金予定及び為替レートを検討したうえで実行しております。また、その管理は経理部が営業各部より販売契約残高の報告を求め商社及び金融機関からの残高通知書との照合及び実需との確認を行うとともに、毎月の取引実績を役員会へ報告しております。また、相手先は、信用度の高い総合商社及び金融機関のみであり、契約が履行されないことによるリスクは極めて少ないものと判断しております。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては、変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

現金については、現金であること、預金、受取手形及び売掛金、買掛金、未払法人税等、未払消費税等については、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

前連結会計年度(2025年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1)投資有価証券			
その他有価証券	17,593	17,593	—
資産計	17,593	17,593	—
(2)デリバティブ取引(※3)	43	43	—

(※1)市場価格のない株式等は、「(1)投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

区分	前連結会計年度(百万円)
非上場株式	130

(※2)デリバティブ取引によって生じた正味の債権、債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

当連結会計年度(2026年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1)投資有価証券			
その他有価証券	25,858	25,858	—
資産計	25,858	25,858	—
(2)デリバティブ取引(※3)	△42	△42	—

(※1)市場価格のない株式等は、「(1)投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

なお、当連結会計年度において、非上場株式について81百万円減損処理を行っております。

区分	当連結会計年度(百万円)
非上場株式	1,954

(※2)デリバティブ取引によって生じた正味の債権、債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

(注) 金銭債権の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2025年3月31日)

	1年以内(百万円)
現金及び預金	17,420
受取手形及び売掛金	9,266
合計	26,687

当連結会計年度(2026年3月31日)

	1年以内(百万円)
現金及び預金	17,533
受取手形及び売掛金	9,378
合計	26,912

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

前連結会計年度(2025年3月31日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
その他有価証券				
株式	17,442	—	—	17,442
その他	151	—	—	151
資産計	17,593	—	—	17,593
デリバティブ取引				
通貨関連	—	43	—	43
負債計	—	43	—	43

当連結会計年度(2026年3月31日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
その他有価証券				
株式	25,638	—	—	25,638
その他	220	—	—	220
資産計	25,858	—	—	25,858
デリバティブ取引				
通貨関連	—	△42	—	△42
負債計	—	△42	—	△42

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

現金については、現金であること、預金、受取手形及び売掛金、買掛金、未払法人税等、未払消費税等については、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

これにより、該当するものはありません。

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

デリバティブ取引

これらの時価については、取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定しており、レベル2の時価に分類しております。

(有価証券関係)

1 その他有価証券

前連結会計年度(2025年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの			
① 株式	15,590	2,262	13,327
② その他	151	39	111
小計	15,741	2,302	13,439
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの			
株式	1,852	1,910	△58
小計	1,852	1,910	△58
合計	17,593	4,213	13,380

(注) 表中の「取得原価」は減損処理後の帳簿価額であります。

当連結会計年度(2026年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの			
① 株式	25,638	4,168	21,470
② その他	220	39	180
小計	25,858	4,207	21,651
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの			
株式	—	—	—
小計	—	—	—
合計	25,858	4,207	21,651

(注) 表中の「取得原価」は減損処理後の帳簿価額であります。

2 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	635	500	—
合計	635	500	—

当連結会計年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	177	133	—
合計	177	133	—

3 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

当連結会計年度において、非連結子会社株式について81百万円の減損処理を行っております。

(デリバティブ取引関係)

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

通貨関連

前連結会計年度(2025年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引 以外の取引	為替予約取引 売建				
	米ドル	1,827	—	43	43
	ユーロ	112	—	△0	△0
合計		1,940	—	43	43

当連結会計年度(2026年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引 以外の取引	為替予約取引 売建				
	米ドル	1,549	—	△42	△42
	ユーロ	—	—	—	—
合計		1,549	—	△42	△42

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社グループは確定給付型の制度として、確定給付企業年金制度及び退職金制度を設けております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	(百万円)	
	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
退職給付債務の期首残高	2,150	2,184
勤務費用	103	105
利息費用	27	28
数理計算上の差異の発生額	8	△341
退職給付の支払額	△105	△109
その他	△0	△0
退職給付債務の期末残高	2,184	1,867

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	(百万円)	
	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
年金資産の期首残高	1,590	1,677
期待運用収益	13	13
数理計算上の差異の発生額	△0	△0
事業主からの拠出額	180	181
退職給付の支払額	△105	△109
年金資産の期末残高	1,677	1,762

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債の調整表

	(百万円)	
	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	2,184	1,867
年金資産	△1,677	△1,762
	507	104
非積立型制度の退職給付債務	0	0
連結貸借対照表に計上された負債の純額	507	104
退職給付に係る負債	507	104
連結貸借対照表に計上された負債の純額	507	104

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	(百万円)	
	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
勤務費用	103	105
利息費用	27	28
期待運用収益	△13	△13
数理計算上の差異の費用処理額	△6	△3
確定給付制度に係る退職給付費用	112	116

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（法人税等及び税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	(百万円)	
	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
数理計算上の差異	△15	337

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（法人税等及び税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	(百万円)	
	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
未認識数理計算上の差異	△17	△354

(7) 年金資産に関する事項

①年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
一般勘定	100%	100%

②長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしております。）

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
割引率	1.30%	3.00%
長期期待運用収益率	0.82%	0.83%

(注) なお、上記の他に2024年3月31日を基準日として算定した年齢別昇給指数を使用しております。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
繰延税金資産		
減損損失	20百万円	1,928百万円
棚卸資産評価損	154	150
賞与引当金	111	103
未払事業税	33	53
退職給付に係る負債	159	33
投資有価証券	13	32
貸倒引当金	15	16
未払社会保険料	16	15
長期末払金	9	9
助成金見積額	55	8
その他	11	10
繰延税金資産小計	600	2,361
評価性引当額	△64	△80
繰延税金資産合計	535	2,281
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△4,129	△6,726
固定資産圧縮積立金	△7	△6
繰延税金負債合計	△4,136	△6,733
繰延税金負債の純額	△3,601	△4,451

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
法定実効税率	30.6%	—
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.0%	—
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.7	—
住民税均等割等	0.1	—
税率変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の増減	△0.1	—
評価性引当額の増減	0.0	—
試験研究費控除税額	△0.1	—
賃上げ促進税制による税額控除	△0.4	—
その他	0.2	—
税効果会計適用後の法人税等の負担率	29.6%	—

(注) 当連結会計年度は、税金等調整前当期純損失であるため注記を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

当社では、京都府及び岡山県その他の地域において、賃貸利用している不動産及び工場跡地等を有しております。
なお、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

		前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
連結貸借対照表計上額	期首残高	122	122
	期中増減額	△0	△5
	期末残高	122	116
期末時価		1,616	1,610

- (注) 1 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。
2 期中増減額のうち、主なものは減価償却による減少です。
3 期末の時価は、主として「不動産鑑定評価基準」に基づいて自社で算定した金額（指標等を用いて調整を行ったものを含む。）であります。

また、賃貸等不動産に関する損益は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
賃貸収益	50	54
賃貸費用	7	7
差額	42	46
その他(損益)	△8	△8

- (注) 賃貸収益は営業外収益に、賃貸費用は、営業外費用に計上しております。

(収益認識関係)

1 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
アルミニウム製錬用 カソードブロック	22,002	16,949
人造黒鉛電極	4,524	4,482
特殊炭素製品	3,653	2,896
ファインパウダー 及びその他炭素製品	998	772
合計	31,179	25,101

2 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

「会計方針に関する事項」の「重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

3 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

(1) 契約資産及び契約負債の残高等

当社グループの契約資産及び契約負債については、残高に重要性が乏しく、重要な変動も発生していないため、記載を省略しております。また、過去の期間に充足（又は部分的に充足）した履行義務から、当連結会計年度に認識した収益に重要性はありません。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社グループでは、残存履行義務に配分した取引価格については、当初に予想される契約期間が1年を超える重要な契約がないため、実務上の便法を適用し、記載を省略しております。また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社及び連結子会社は炭素製品の製造・販売を主な事業とする単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2024年4月1日 至 2025年3月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

(単位：百万円)

	アルミニウム製錬用 カソードブロック	人造黒鉛電極	特殊炭素製品	ファインパウダー 及びその他炭素製品	合計
外部顧客への売上高	22,002	4,524	3,653	998	31,179

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	米州	アジア・中近東	欧州	その他の地域	合計
7,284	7,769	8,877	2,278	4,968	31,179

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。
米州のうち、カナダは4,409百万円であります。
アジア・中近東のうち、アラブ首長国連邦は3,408百万円であります。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高
住商CRM(株)	20,768

当連結会計年度（自 2025年4月1日 至 2026年3月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

(単位：百万円)

	アルミニウム製錬用 カソードブロック	人造黒鉛電極	特殊炭素製品	ファインパウダー 及びその他炭素製品	合計
外部顧客への売上高	16,949	4,482	2,896	772	25,101

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	米州	アジア・中近東	欧州	その他の地域	合計
6,745	5,888	7,631	1,849	2,986	25,101

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。
米州のうち、カナダは2,757百万円、ブラジルは2,727百万円であります。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高
住商CRM(株)	14,514

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

当社グループは単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

当社グループは単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

当社グループは単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連当事者情報】

関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る。）等

前連結会計年度（自 2024年4月1日 至 2025年3月31日）

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及びその近親者が議決権の過半数を所有している会社(当該会社の子会社を含む)等	大谷製鉄㈱	富山県射水市	480	棒鋼製造販売	(被所有)直接19.9	当社製品の販売 役員の兼任	製品の販売	288	売掛金	56

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

- 1 大谷製鉄㈱の議決権は、当社役員及びその近親者が86.4%を所有しております。（間接所有15.0%）
- 2 大谷製鉄㈱との取引は、市場価格を勘案して取引条件を取締役会で決定しております。
- 3 大谷製鉄㈱は、「連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等」グループの種類「その他の関係会社」及び「主要株主」にも該当しております。

当連結会計年度（自 2025年4月1日 至 2026年3月31日）

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及びその近親者が議決権の過半数を所有している会社(当該会社の子会社を含む)等	大谷製鉄㈱	富山県射水市	480	棒鋼製造販売	(被所有)直接19.9	当社製品の販売 役員の兼任	製品の販売	279	売掛金	37

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

- 1 大谷製鉄㈱の議決権は、当社役員及びその近親者が86.4%を所有しております。（間接所有15.0%）
- 2 大谷製鉄㈱との取引は、市場価格を勘案して取引条件を取締役会で決定しております。
- 3 大谷製鉄㈱は、「連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等」グループの種類「その他の関係会社」及び「主要株主」にも該当しております。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
1株当たり純資産額	3,680.64円	3,871.46円
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失(△)	285.59円	△3.72円

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2 1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失		
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△)(百万円)	5,750	△74
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△)(百万円)	5,750	△74
普通株式の期中平均株式数(株)	20,135,249	20,047,696

3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	73,801	77,628
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	13	14
(うち非支配株主持分)	(13)	(14)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	73,788	77,613
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数(株)	20,047,746	20,047,645

(重要な後発事象)

(自己株式の取得)

当社は、2026年5月14日開催の取締役会において、会社法第459条第1項及び当社定款の規定に基づき自己株式取得に係る事項について決議いたしました。

1 自己株式の取得を行う理由

当社は2026年4月10日開示の「中長期経営方針 2030 Make Real」において、資本政策推進の取り組みの一環として、向こう3年で70億円を目安とする自己株式を取得する方針としております。かかる方針に基づき、以下のとおり自己株式の取得を行う事により、株主への一層の利益還元を図るとともに、資本効率の向上による更なる企業価値向上を図ることとしました。

2 取得の内容

- | | |
|----------------|--|
| (1) 取得対象株式の種類 | 当社普通株式 |
| (2) 取得する株式の総数 | 450,000 株 (上限)
(自己株式を除く発行済株式総数に対する割合 2.24%) |
| (3) 株式の取得価額の総額 | 1,000,000,000 円 (上限) |
| (4) 取得期間 | 2026年5月15日から2026年11月30日 |
| (5) 取得方法 | 東京証券取引所における市場買付 |

(注) 今回決議した取得期間内であっても、株価等の状況で上限額 (上限株数) まで取得しない場合があります。

⑤ 【連結附属明細表】

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
1年以内に返済予定のリース債務	2	8	—	—
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	7	25	—	2027年4月～ 2030年7月
合計	10	34	—	—

(注) 1 リース債務については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額で連結貸借対照表に計上しているため「平均利率」の記載を省略しております。

2 リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年内における1年ごとの返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
リース債務(百万円)	8	8	6	1

(2) 【その他】

当連結会計年度における半期情報等

	中間連結会計期間	当連結会計年度
売上高 (百万円)	10,299	25,101
税金等調整前中間純利益又は税金等調整前当期純損失 (△) (百万円)	2,256	△423
親会社株主に帰属する中間純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 (△) (百万円)	1,634	△74
1株当たり中間純利益又は1株当たり当期純損失 (△) (円)	81.51	△3.72

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	17,157	17,105
受取手形	※1 252	※1 216
売掛金	※1 8,567	※1 8,951
商品及び製品	1,895	3,192
仕掛品	13,038	11,766
原材料及び貯蔵品	2,917	3,293
その他	※1 1,306	※1 507
貸倒引当金	△17	△18
流動資産合計	45,118	45,015
固定資産		
有形固定資産		
建物	4,080	4,806
構築物	702	645
機械及び装置	2,990	4,945
車両運搬具	2	5
工具、器具及び備品	71	79
土地	1,262	1,262
リース資産	7	19
建設仮勘定	8,505	1,552
有形固定資産合計	17,623	13,316
無形固定資産		
施設利用権	1	1
ソフトウェア	42	49
リース資産	-	4
ソフトウェア仮勘定	2	0
無形固定資産合計	46	55
投資その他の資産		
投資有価証券	17,604	25,869
関係会社株式	130	1,974
その他	185	176
貸倒引当金	△9	△9
投資その他の資産合計	17,911	28,011
固定資産合計	35,581	41,384
資産合計	80,699	86,400

(単位：百万円)

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	※1 1,448	※1 1,844
リース債務	2	8
未払金	※1 283	※1 581
未払費用	※1 562	※1 538
未払法人税等	331	863
賞与引当金	362	328
設備関係未払金	215	406
その他	※1 49	※1 110
流動負債合計	3,254	4,680
固定負債		
リース債務	7	25
長期未払金	31	31
繰延税金負債	3,595	4,340
退職給付引当金	521	455
固定負債合計	4,156	4,852
負債合計	7,410	9,533
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,913	5,913
資本剰余金		
資本準備金	4,705	4,705
その他資本剰余金	541	541
資本剰余金合計	5,247	5,247
利益剰余金		
利益準備金	762	762
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	15	14
別途積立金	6,600	6,600
繰越利益剰余金	46,835	44,740
利益剰余金合計	54,213	52,117
自己株式	△1,336	△1,336
株主資本合計	64,038	61,942
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	9,250	14,924
評価・換算差額等合計	9,250	14,924
純資産合計	73,289	76,866
負債純資産合計	80,699	86,400

② 【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2024年 4月 1日 至 2025年 3月 31日)	当事業年度 (自 2025年 4月 1日 至 2026年 3月 31日)
売上高	※1 30,458	※1 24,522
売上原価	※1 19,574	※1 16,822
売上総利益	10,883	7,700
販売費及び一般管理費	※2 4,205	※2 3,753
営業利益	6,677	3,946
営業外収益		
受取利息	※1 68	※1 131
受取配当金	※1 899	※1 853
雑収入	※1 130	※1 737
営業外収益合計	1,098	1,722
営業外費用		
雑支出	195	24
営業外費用合計	195	24
経常利益	7,580	5,644
特別利益		
投資有価証券売却益	500	133
特別利益合計	500	133
特別損失		
固定資産除却損	46	95
関係会社株式評価損	-	※3 76
減損損失	-	6,063
特別損失合計	46	6,235
税引前当期純利益又は税引前当期純損失 (△)	8,034	△457
法人税、住民税及び事業税	2,121	1,486
法人税等調整額	244	△1,852
法人税等合計	2,365	△366
当期純利益又は当期純損失 (△)	5,668	△91

【製造原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)		当事業年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)	
		金額(百万円)	構成比 (%)	金額(百万円)	構成比 (%)
I 材料費		12,658	68.3	9,657	58.1
II 労務費		2,002	10.8	2,002	12.1
(このうち賞与引当金 繰入額)		(278)		(253)	
III 経費		3,873	20.9	4,950	29.8
(このうち減価償却費)		(1,211)		(1,943)	
(このうち業務委託費)		(892)		(907)	
当期総製造費用		18,534	100.0	16,610	100.0
仕掛品期首棚卸高		13,194		13,038	
合計		31,729		29,648	
仕掛品期末棚卸高		13,038		11,766	
他勘定受入高	※1	11		13	
他勘定振替高	※2	1		0	
当期製品製造原価		18,700		17,895	

(注) 原価計算の方法

当社の原価計算は、前事業年度、当事業年度とも組別工程別総合原価計算によっております。

※1 他勘定受入高

項目	前事業年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当事業年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
貯蔵品より振替(百万円)	11	13

※2 他勘定振替高

項目	前事業年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当事業年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
研究開発費へ振替(百万円)	1	0

③ 【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	5,913	4,705	541	5,246
当期変動額				
固定資産圧縮積立金の取崩				
剰余金の配当				
当期純利益				
自己株式の取得				
自己株式の処分			0	0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)				
当期変動額合計	-	-	0	0
当期末残高	5,913	4,705	541	5,247

	株主資本				
	利益準備金	その他利益剰余金			利益剰余金合計
		固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	762	17	6,600	43,508	50,888
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の取崩		△1		1	-
剰余金の配当				△2,343	△2,343
当期純利益				5,668	5,668
自己株式の取得					
自己株式の処分					
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	△1	-	3,326	3,325
当期末残高	762	15	6,600	46,835	54,213

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△692	61,356	11,098	11,098	72,454
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の取崩		-			-
剰余金の配当		△2,343			△2,343
当期純利益		5,668			5,668
自己株式の取得	△643	△643			△643
自己株式の処分	0	0			0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			△1,847	△1,847	△1,847
当期変動額合計	△643	2,681	△1,847	△1,847	834
当期末残高	△1,336	64,038	9,250	9,250	73,289

当事業年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	5,913	4,705	541	5,247
当期変動額				
固定資産圧縮積立金の取崩				
剰余金の配当				
当期純損失(△)				
自己株式の取得				
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)				
当期変動額合計	-	-	-	-
当期末残高	5,913	4,705	541	5,247

	株主資本				
	利益準備金	利益剰余金			利益剰余金合計
		その他利益剰余金			
固定資産圧縮積立金		別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	762	15	6,600	46,835	54,213
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の取崩		△1		1	-
剰余金の配当				△2,004	△2,004
当期純損失(△)				△91	△91
自己株式の取得					
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	△1	-	△2,094	△2,096
当期末残高	762	14	6,600	44,740	52,117

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△1,336	64,038	9,250	9,250	73,289
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の取崩		-			-
剰余金の配当		△2,004			△2,004
当期純損失(△)		△91			△91
自己株式の取得	△0	△0			△0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			5,673	5,673	5,673
当期変動額合計	△0	△2,096	5,673	5,673	3,577
当期末残高	△1,336	61,942	14,924	14,924	76,866

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

① 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

② その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は主として移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

主として移動平均法による原価法

(2) デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法

(3) 棚卸資産の評価基準及び評価方法

総平均法による原価法 (収益性の低下による簿価切下げの方法)

(ただし貯蔵品は先入先出法による)

2 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産 (リース資産を除く) 定率法 (ただし岡山工場については定額法)

1998年4月1日以降に取得した建物 (建物附属設備を除く) 並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

(2) 無形固定資産 (リース資産を除く) 定額法

なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

ただし、ソフトウェア (自社利用分) については、社内における利用可能期間 (5年) に基づく定額法を採用しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法を採用しております。

3 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権は、貸倒実績率法によっており、貸倒懸念債権及び破産更生債権等は、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

② 数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定率法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

4 収益及び費用の計上基準

当社は、炭素製品の製造・販売を主な事業としており、その履行義務は、製品の販売です。

これは、財又はサービスが引き渡される一時点で充足される履行義務であり、国内取引においては、製品の出荷時点から当該製品の支配が顧客に移転されるまでの期間が、国内における出荷及び配送に要する日数に照らして合理的と考えられる日数であることから、「収益認識に関する会計基準の適用指針」第98項を適用し、製品の出荷時点で収益を認識しております。

輸出取引においては、インコタームズ等で定められた貿易条件に基づきリスク負担が顧客に移転した時点で収益を認識しております。

5 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

(2) ヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

予定取引に係る為替予約等に関して、繰延ヘッジ処理を採用しております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

外貨建取引（金銭債権債務及び外貨建予定取引）の為替変動リスクに対して為替予約取引等をヘッジ手段として用いております。

③ ヘッジ方針

為替予約等は通常の取引の範囲内で、外貨建営業債権債務に係る将来の為替レート変動リスクを回避する目的で為替予約取引等を行っております。為替予約取引等は通常の外貨建売上債権に係る輸出実績等を踏まえ、必要な範囲で実施しております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ手段及びヘッジ対象について、個々の取引毎のヘッジの有効性を評価しておりますが、ヘッジ対象となる外貨建取引と為替予約取引等について、通貨、金額、期間等の条件が同一の場合は、ヘッジの有効性が極めて高いことから評価を省略しております。

⑤ その他リスク管理方法のうちヘッジ会計に係るもの

当社の為替予約取引等は、社内規程に基づき、基本方針について代表取締役の承認を得て、経理部が営業各部作成の入金予定及び為替レートを検討したうえで実行しております。また、その管理は経理部が営業各部より販売契約残高の報告を求め商社及び金融機関からの残高通知書との照合及び実需との確認を行うとともに、毎月の取引実績を役員会へ報告しております。

また、経営企画室も内部監査等を実施し、リスク管理に努めております。

(3) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(重要な会計上の見積り)

1 棚卸資産の評価

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
商品及び製品	1,895	3,192
仕掛品	13,038	11,766
原材料及び貯蔵品	2,917	3,293

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

連結財務諸表「注記事項（重要な会計上の見積り）1 棚卸資産の評価」に同一の内容を記載しているため、記載を省略しております。

2 固定資産の評価

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
有形固定資産	17,623	13,316
無形固定資産	46	55
減損損失	—	6,063

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

連結財務諸表「注記事項（重要な会計上の見積り）2 固定資産の評価」に同一の内容を記載しているため、記載を省略しております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

区分表示されたもの以外で当該関係会社に対する金銭債権又は金銭債務の金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
短期金銭債権	447百万円	509百万円
短期金銭債務	104	222

2 保証債務

連結会社以外の会社の金融機関等からの借入金に対して、次のとおり債務保証を行っております。

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
アイ'エムセップ(株)	13百万円	アイ'エムセップ(株) 9百万円

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当事業年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
売上高	1,230百万円	913百万円
その他の営業取引高	785	808
営業取引以外の取引高	9	14

※2 販売費及び一般管理費の主なもののうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当事業年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
荷造費、運賃及び保管料	1,124百万円	913百万円
販売手数料	1,061	799
給料、諸手当(役員報酬含む)	578	600
賞与引当金繰入額	83	74
退職給付費用	21	20
減価償却費	12	15
研究開発費	555	573
おおよその割合		
販売費	53%	47%
一般管理費	47	53

※3 関係会社株式評価損

前事業年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

関係会社株式評価損76百万円は、当社の非連結子会社であるアイ'エムセップ(株)に対するものであります。

(有価証券関係)

前事業年度 (2025年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格のない株式等のため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載しておりません。

なお、市場価格のない株式等の子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は、次のとおりです。

区分	前事業年度 (百万円)
子会社株式	122
関連会社株式	8
計	130

当事業年度 (2026年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格のない株式等のため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載しておりません。

なお、市場価格のない株式等の子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は、次のとおりです。

区分	当事業年度 (百万円)
子会社株式	45
関連会社株式	1,929
計	1,974

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
繰延税金資産		
減損損失	20百万円	1,928百万円
棚卸資産評価損	154	150
退職給付引当金	163	143
賞与引当金	110	103
未払事業税	29	53
投資有価証券	13	32
貸倒引当金	15	16
未払社会保険料	16	15
長期未払金	9	9
助成金見積額	55	8
その他	11	10
繰延税金資産小計	600	2,472
評価性引当額	△59	△79
繰延税金資産合計	541	2,393
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△4,129	△6,726
固定資産圧縮積立金	△7	△6
繰延税金負債合計	△4,136	△6,733
繰延税金負債の純額	△3,595	△4,340

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
法定実効税率	30.6%	—
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.0%	—
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.7	—
住民税均等割等	0.1	—
試験研究費控除税額	△0.1	—
税率変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の増減	△0.1	—
賃上げ促進税制による税額控除	△0.4	—
その他	0.0	—
税効果会計適用後の法人税等の負担率	29.4%	—

(注) 当事業年度は、税引前当期純損失であるため注記を省略しております。

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表「注記事項（収益認識関係）」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

(自己株式の取得)

連結財務諸表「注記事項（重要な後発事象）（自己株式の取得）」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

④ 【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位:百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	4,080	3,914	2,822 (2,821)	366	4,806	8,295
	構築物	702	59	39 (33)	77	645	2,620
	機械及び装置	2,990	6,514	3,022 (3,021)	1,537	4,945	43,129
	車両運搬具	2	6	0 (0)	3	5	79
	工具、器具及び備品	71	56	9 (9)	38	79	848
	土地	1,262	—	0	—	1,262	—
	リース資産	7	21	4 (4)	5	19	6
	建設仮勘定	8,505	3,794	10,747 (169)	—	1,552	—
	計	17,623	14,368	16,646 (6,060)	2,028	13,316	54,978
無形固定資産	施設利用権	1	—	0	—	1	—
	ソフトウェア	42	29	3 (3)	19	49	—
	リース資産	—	4	—	0	4	—
	ソフトウェア仮勘定	2	2	3	—	0	—
	計	46	37	7 (3)	20	55	—

(注) 1. 当期増加額の主なもの

建物

京都工場	黒鉛化工場建屋	2,881
------	---------	-------

機械及び装置

京都工場	黒鉛化炉設備	3,388
	焼成炉設備	1,594

2. 当期減少額のうち()内は内書きで減損損失の計上額であります。

【引当金明細表】

(単位:百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	26	18	17	27
賞与引当金	362	328	362	328

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 大阪市中央区伏見町三丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社 大阪証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告により行います。ただし、事故等やむを得ない事由により電子公告による公告が出来ない場合は日本経済新聞に掲載して行います。 なお、電子公告は当社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりであります。 https://sec-carbon.com/
株主に対する特典	ありません。

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株式を有する株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができません。

- 1 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- 2 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- 3 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
- 4 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

- | | | | | |
|-----|-------------------------------|------------------|-----------------------------|--|
| (1) | 有価証券報告書
及びその添付書類
並びに確認書 | 事業年度
(第105期) | 自 2024年4月1日
至 2025年3月31日 | 2025年6月26日
関東財務局長に提出。 |
| (2) | 内部統制報告書及びその添付書類 | | | 2025年6月26日関東財務局長に提出。 |
| (3) | 半期報告書
及び確認書 | 事業年度
(第106期中) | 自 2025年4月1日
至 2025年9月30日 | 2025年11月13日
関東財務局長に提出。 |
| (4) | 臨時報告書 | | | 企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく
臨時報告書
2025年6月27日関東財務局長に提出。 |
| | | | | 企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第12号及び第19号(特別損失を計上)の規定に基づく臨時報告書
2026年5月14日関東財務局長に提出。 |
| (5) | 自己株券買付状況報告書 | | | 2026年6月3日関東財務局長に提出。 |

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2026年6月17日

S E Cカーボン株式会社
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

神戸事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 鈴木 朋之

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 福岡 宏之

<連結財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているS E Cカーボン株式会社の2025年4月1日から2026年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、S E Cカーボン株式会社及び連結子会社の2026年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

棚卸資産の評価	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>連結貸借対照表に計上されている「商品及び製品」3,193百万円及び「仕掛品」11,766百万円については、SECカーボン株式会社（以下、「会社」という）が製造・販売するアルミニウム製錬用カソードブロック、人造黒鉛電極、特殊炭素製品等が計上されている。このうち、人造黒鉛電極の棚卸資産は5,934百万円であり、連結総資産の6.8%を占めている。</p> <p>会社は【注記事項】（連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項）の「4 会計方針に関する事項（1）重要な資産の評価基準及び評価方法③棚卸資産」に記載の通り、棚卸資産の評価に関して収益性の低下による簿価切下げの方法を採用している。また、【注記事項】（重要な会計上の見積り）「1 棚卸資産の評価」に記載の通り、基本的には決算月における実績の販売価格から直接販売費を控除した正味売却価額と簿価との比較により評価損の金額を計算しているが、市況の著しい変化等により期末日以降に販売価格の重要な変動があった場合には、契約書など客観的情報に基づいて正味売却価額に反映させている。</p> <p>会社の製品の生産リードタイムは比較的長く、このため棚卸資産残高は多額となっている。また、製品の販売価格や原材料の購入価格は、景気変動等による市場の需給状況に応じて大きく上下するという特徴がある。特に人造黒鉛電極においては、市況や原燃料、電力料金等の変動により、正味売却価額及び簿価がそれらの影響を受けて変動しており、棚卸資産の評価損が多額になる可能性がある。</p> <p>以上より、人造黒鉛電極の棚卸資産の評価は、連結財務諸表への潜在的な影響が大きく、また期末日以降の販売価格の重要な変動に対する正味売却価額への反映に係る正確性や網羅性の検証には慎重な対応が必要であることから、監査上の主要な検討事項と判断した。</p>	<p>当監査法人は、会社の実施した棚卸資産の評価が適切かを判断するにあたり、以下の監査手続を実施した。</p> <p>（1）内部統制の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 棚卸資産の評価に係るシステムが信頼性をもって運用されていることを検討するため、ITに係る全般統制の整備及び運用状況を検討した。 棚卸資産の評価のための資料が信頼性をもってシステムによって生成されていることを検討するため、自動化された業務処理統制の整備及び運用状況を検討した。 棚卸資産の評価に関する決算・財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を検討した。 <p>（2）棚卸資産の評価の妥当性の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> 棚卸資産の評価のための資料を閲覧し、人造黒鉛電極の販売価格、売上原価及び販売直接費の推移分析を実施した。 取締役会議事録及び幹部会議事録に加えて販売価格の決裁資料の閲覧により、正味売却価額に反映すべき将来販売時点での売価の低下見込みがないかを検討した。 前連結会計年度末の棚卸資産の評価結果と当連結会計年度の販売実績を比較することにより、前連結会計年度末の評価が適切であったかを検討した。

人造黒鉛電極の製造に特化した設備に係る固定資産の評価	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>【注記事項】（連結損益計算書関係）※7に記載されている通り、SECカーボン株式会社当連結会計年度の連結損益計算書において、人造黒鉛電極の製造に特化した設備の資産グループに係る減損損失6,063百万円が計上されている。</p> <p>会社は【注記事項】（重要な会計上の見積り）「2 固定資産の評価」に記載されている通り、資産グループに減損の兆候があると認められる場合には、資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額と帳簿価額を比較することによって減損損失の認識の要否を判定する。判定の結果、減損損失の認識が必要とされた場合、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、その減少額を減損損失として計上する。</p> <p>人造黒鉛電極の製造及び販売に関して、粗鋼生産量の低迷が継続していることに伴う需要の後退や、供給過剰下での海外企業による販売攻勢激化等によって、当連結会計年度において継続して営業赤字となったことから、会社は、当該資産グループに減損の兆候があると判断し、回収可能価額が帳簿価額を下回る金額を減損損失として計上している。会社は、回収可能価額を使用価値によって測定しており、将来キャッシュ・フローに基づく使用価値がマイナスとなっていることから、使用価値をゼロと評価している。</p> <p>減損損失の認識の要否の判定及び減損損失の金額の算定にあたっては、経営者が承認した事業計画等に基づく将来キャッシュ・フローの見積りが用いられる。当該見積りにあたり、現下の市場環境を踏まえた将来の売上高の成長率、売上原価及び販売費及び一般管理費の見込額といった経営者の重要な仮定が含まれており、当該仮定には不確実性を伴う。さらに、当連結会計年度において計上された減損損失は金額的重要性が高い。</p> <p>以上より、人造黒鉛電極の製造に特化した設備に係る固定資産の評価が、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、会社の実施した人造黒鉛電極の製造に特化した設備に係る固定資産の評価の適切性を判断するにあたり、以下の監査手続を実施した。</p> <p>（1）内部統制の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・固定資産の評価に関する決算・財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を検討した。 <p>（2）固定資産の評価の妥当性の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去及び当連結会計年度の事業計画の達成状況について部門責任者への質問を実施するとともに関連する指標の推移を検討し、経営環境の変化の有無を検討した。 ・経営者による事業計画に基づく資産グループの将来キャッシュ・フローの見積りについて、その信頼性を評価するために主に以下の手続を実施した。 <p>① 事業計画に関連する取締役会資料等の会社の内部資料を閲覧し、市場環境と整合したものとなっているかどうかを検討した。</p> <p>② 現下の市場環境を踏まえた将来の売上高の成長率について、部門責任者に質問するとともに、利用可能な外部情報と比較して検討した。</p> <p>③ 売上原価及び販売費及び一般管理費の見込額について、部門責任者に質問するとともに、費目別に変動費と固定費とに分解して過去実績及び売上高との整合性を検討した。</p>

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見表明の基礎となる、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手するために、連結財務諸表の監査を計画し実施する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指揮、監督及び査閲に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

<内部統制監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、SECカーボン株式会社の2026年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、SECカーボン株式会社が2026年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手するために、内部統制の監査を計画し実施する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指揮、監督及び査閲に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

<報酬関連情報>

当監査法人及び当監査法人と同一のネットワークに属する者に対する、会社及び子会社の監査証明業務に基づく報酬及び非監査業務に基づく報酬の額は、「提出会社の状況」に含まれるコーポレート・ガバナンスの状況等(3)【監査の状況】に記載されている。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(※) 1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2026年6月17日

S E C カ ー ボ ン 株 式 会 社
取 締 役 会 御 中

有限責任監査法人 トーマツ
神戸事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 鈴木 朋之

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 福岡 宏之

＜財務諸表監査＞

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているS E Cカーボン株式会社の2025年4月1日から2026年3月31日までの第106期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、S E Cカーボン株式会社の2026年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

棚卸資産の評価

連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項（棚卸資産の評価）と同一内容であるため、記載を省略している。

人造黒鉛電極の製造に特化した設備に係る固定資産の評価

連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項（人造黒鉛電極の製造に特化した設備に係る固定資産の評価）と同一内容であるため、記載を省略している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

<報酬関連情報>

報酬関連情報は、連結財務諸表の監査報告書に記載されている。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(※) 1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2026年6月19日
【会社名】	S E Cカーボン株式会社
【英訳名】	SEC CARBON, LIMITED
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 中 島 耕
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	兵庫県尼崎市潮江一丁目2番6号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長中島耕は、当社の第106期(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。

【表紙】

【提出書類】 内部統制報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の4第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2026年6月19日

【会社名】 S E Cカーボン株式会社

【英訳名】 SEC CARBON, LIMITED

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 中 島 耕

【最高財務責任者の役職氏名】 該当事項はありません。

【本店の所在の場所】 兵庫県尼崎市潮江一丁目2番6号

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長中島耕は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の改訂について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものです。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2026年3月31日を基準日として行われており、評価にあたっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況の評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社グループについて、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、財務報告に対する金額的及び質的影響並びにその発生可能性を考慮して決定しており、会社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。なお、連結子会社1社及び持分法適用関連会社1社については、金額的及び質的影響並びにその発生可能性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、当社グループは炭素製品の製造・販売を主な事業とする単一セグメントであります。複数の工場で製造した製品を複数の営業拠点を通じて販売活動を行っていることから、各事業拠点の規模を適切に把握することが可能な選定指標として売上高、棚卸資産及び有形固定資産を用いております。

全社的な内部統制の評価結果が良好であることから、各事業拠点の連結会計年度の売上高、棚卸資産及び有形固定資産（連結会社間取引消去後）の金額が高い拠点から合算していき、連結会計年度の連結売上高、棚卸資産及び有形固定資産のおおむね3分の2程度に達している3事業拠点を「重要な事業拠点」としました。

選定した重要な事業拠点においては、当社グループは炭素製品の製造・販売が主な収益獲得活動であり、その過程で多額に計上される勘定科目として売上高、売掛金、棚卸資産及び有形固定資産に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセス（固定資産の減損会計及び税効果会計等）を財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断しました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。